

としまアートステーションXのつくりかた 目次

P. 3

考える編

- としまアートステーション構想とは
- としまアートステーションXとは
- としまアートステーションXに至るまで

P. 9

つくる編

拠点を開くことで人々を育てる

- ・介護福祉施設 × 居間 theater
- ・コラム：木賃アパートを地域に開く（としまアートステーションY）

人々を巻き込む活動を起こす

- ・都心の住まい × 北川貴好
- ・コラム：上池ホームズ計画（としまアートステーションY）

人々をつなぐことで活動を育てる

- ・地域に密着した場 × オノコラー
- ・コラム：作業日（としまアートステーションZ）

活動を持ち込むことで人々を巻き込む

- ・区役所 × 居間 theater
- ・アートステーション × 居間 theater

P. 47

まとめ編

- アートステーションをめぐる言葉
- シンポジウム「人とまちをつなぐアート／その実践と展望」
- オノコラーの声
- 事務局の声

P. 76

としまアートステーション構想実施概要

考える編

としまアートステーション構想とは

としまアートステーションXとは

としまアートステーションXに至るまで



アートを生み出すささやかな営みを、「アートステーション」と呼ぶことにしました。

アートはもともと「技」の意味。人の手によって何かを生み出す技がアートです。絵画や彫刻をつくるばかりでなく、日常のなかにほっとする、またはぎょっとする異空間を生み出すのもアートです。だから、アートとの関わりかたは、きれいな「モノ」をつくったり、美術館で鑑賞することだけに限りません。もしかしたら、それは一般市民の生活のなかにまぎれこんでいて、普段やっていることやこれからやろうとしていることの、すぐ近くにあるかもしれません。

ふつう、ステーションといえば鉄道の駅。だけど、他にもいろんな機能を持つ「〇〇ステーション」があります。宇宙ステーションは宇宙の研究や実験をする最前線。ガスステーションは燃料を補給するところ。ラジオステーションは番組を発信する基地局。ナースステーションは看護師さんの詰所。アートステーションは、アートをめぐって研究や実験をしたり、補給や発信をしたり、人が集って話し合ったり、その他いろんな機能を持つでしょう。

としまアートステーション構想は、ハードをつくることを目的とした事業ではありません。豊島区民をはじめとする多様な人々が、さまざまな場所で、自主的・自発的に、まちなかの地域資源を活用した活動を展開することを目指す事業です。つまり、多様な人々が、自分たちの手でアートステーションをつくり出してゆくことがゴールなのです。

そのために、としまアートステーション構想は、「アートステーション」という概念を実現するた

めのさまざまな設計図を考え、さまざまなモデルケースをつくってきました。そして、この実験の過程や結果を、アートステーションをつくりたいと思う誰もが参照したり活用したり流用したりできる公共財として、残そうとしてきました。だから、この事業には「構想」という名前がついています。いつかどこかで誰かが、それぞれのアートステーションをつくり出すための「構想」を描き、広く伝えること。それが、この事業が目指してきた新しい公共文化事業としての役割です。

「アートステーション」という概念を実現するための方法として、「としまアートステーションX」という設計図を考えました。

としまアートステーションXは、「関数」みたいなアートステーションです。特定の場所の名前ではありません。関数のXにいろんな数字を代入するといろんな答えが出てくるように、Xにいろんな場所を当てはめて、いろんなアートステーションを生み出します。としまアートステーションXは、「かけ算」によるアートステーションでもあります。地域にすでにある場所と人をかけ合わせることで、その組み合わせならではのアートステーションを生み出します。としまアートステーションXの具体的なありかたは、Xに代入するものや、かけ合わせるものによって、さまざまなかたちをとるでしょう。

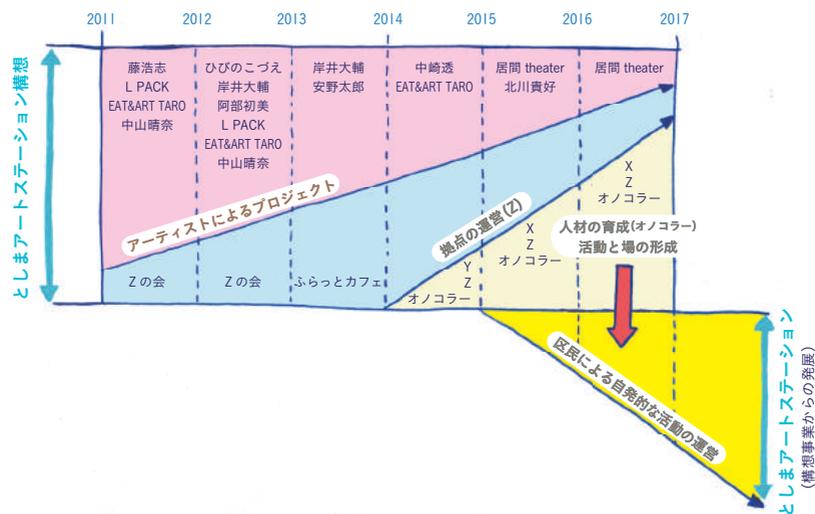
2015～2016年度の2年間にわたり、としまアートステーションXの一環としてつくり出した5つのモデルケースは、「代入」と「かけ算」という設計図をその出発点としながらも、実際にでき上がってみると、互いに似ても似つかないものになりました。一方で、それぞれのXには、としまアートステーションZでの「作業日」による場づくりや、としまアートステーションYという区民主体の拠点の立ち上げ、そして、ゆるやかなネットワーク内のその都度の協働によって小さな活動を複数展開した「上池ホームズ計画」にも通じる何かがあるようにも思われたのです。

私たちは、としまアートステーションXが、としまアートステーションZやY、その他さまざまなアートステーションをも包括する、大きな設計図なのではないか、という仮説にたどり着きました。そうであるとすれば、としまアートステーションXとはなんだったのかを問うことは、としま

アートステーション構想とはなんだったのかを問うことでもあるでしょう。

以下では、まず、としまアートステーション構想の活動を時系列に沿って振り返ることで、「代入」と「かけ算」というアイデアが生まれた背景を概観します。続いて、としまアートステーションXとして実施した5つのプロジェクトを、「人」「活動」「場」というアートステーションの3要素に対して、どのようなアプローチを試みているかという観点で整理します。そのうえで、としまアートステーションXを、ZやYと再接続することを試みます。

としまアートステーションXに至るまで



としまアートステーション構想事業の変遷と展望

としまアートステーション構想は、東京都、豊島区、東京文化発信プロジェクト室^{※1}（公益財団法人東京歴史文化財団）、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン^{※2}の共催により、2011年にスタートしました。活動拠点は、東京メトロ副都心線雑司が谷駅直結のとしまアートステーションZ（以下、Z）。公共施設の一隅にある元食堂を活用したスペースです。

第1フェーズ（2011～2013年度）では、「アートプロジェクト」と「アートサポート」という2つの枠組みを設けました。「アートプロジェクト」では、アーティストが主体となって地域をリサーチし、作品を制作しました。その姿を市民に見せたり、ときには制作プロセスに市民を巻き込んでいくことで、市民の創造性を触発しようという試みです。一方の「アートサポート」は、Zに会場とする市民による活動を支援する試みです。事務局

が主体となって誰でも気軽に立ち寄れる場をつくり、豊島区内外のアートや地域に関する情報提供や、勉強会を実施しました。

一般社団法人オノコロが事務局を引き継いだ第2フェーズ（2014～2016年度）では、「アートプロジェクト」と「アートサポート」を本来不可分なものとして捉え直す一方で、アートステーションの設計図とモデルケースをつくることと、それによって区民の主体的な活動とその担い手を育てることを事業の柱に据え、「としまアートステーションZ（2014～2016年度）」、「としまアートステーションY（2014年度）」、「としまアートステーションX（2015～2016年度）」という3つの事業を展開しました。

第2フェーズを進めていくうえで欠かせない存在が、プロジェクトメンバーである「オノコラー」です。「オノコラー」という名称には「おのずと

ころがる人」「自主的・自発的に活動をはじめの人」という意味が込められています。2014年度から公募をはじめ、2016年度までに述べ137人（実人数80人）が参加しています。

「オノコラー」は、アートステーションのかたちをともに探究するパートナーであったと同時に、私たちが思い描く区民に対する、そして、区民と文化事業との関係に対する宣言でもありました。それは、プロジェクトの活動を区民が手伝うという従来のサポーターとしての関係ではなく、主体者として活動をはじめた区民をプロジェクトが支援するという関係です。

オノコラーの誕生に伴って、Zのありかたも再検討しました。そこで生まれたコンセプトが「準備室」です。区民にとっては、ゆくゆく自分たちの手でつくり出すアートステーションこそが「本番」で、Zはあくまでもそのための「準備」の場。だから、まだきちんとしたかたちになっていなくても、試行錯誤をじゅうぶんにできるように、どんな作業でも持ち込める「作業日」という枠組みをつくり、人をつなぐことや活動を起こすことに注力しました。

作業日を進めていくなかで、Zにおいて、オノコラーが来場者も巻き込んだグループ活動を充実させていく一方で、積極的にZの外に出ていかなければ、せっかく生まれたその活動も地域に広がっていかないのではないか、という懸念が生まれてきました。地域に出て、もうひとつのアートステーションを区民主体で立ち上げてみれば、そのための方法論やクリアすべき課題もはっきりするのではないか。そんな期待を込めてはじまったのが「としまアートステーションY（以下、Y）」でした。

Yは、2重の意味を持っています。ひとつは、上池袋の木造賃貸アパートのオーナーである山本

山田夫妻とともに立ち上げた「拠点＝山田荘」の開発コードのようなものです。同時に、アーティスト・中崎透の「上池ホームズ計画」のもと、オノコラーたちが山田荘やその周辺の小学校、区民ひろば（公民館）、公園、路地などさまざまな場所で行った一連の活動を含む名称でもありました。後者の意味を発見したことで、アートステーションのかたちは、拠点を開くことだけではないのではないか、まちのあちこちで行った小さな活動のひとつひとつもアートステーションと呼ぶのではないかと、というアイデアが生まれました。そんな目でもう一度まちを眺めると、機能によって埋め尽くされたかに見える都市においてさえ、小さな活動が入り込めそうな「すき間」がたくさんあることに気づいたのです。

同時に、「作業日」や「上池ホームズ計画」を通して、オノコラーにもさまざまな役割があることが見えてきました。自ら企画を考える人、他の人の企画をサポートする人、拠点を開く人、その場に人が居やすいように空間や雰囲気をつくる人。複数の役割がうまく結びついたときに、活動が生まれたり続いたりすることもわかってきました。また、Yによるスタートアップを経た「山田荘」が、本事業から離れ、オーナー自身の手によって引き続き運営されていくことに決まりました。それによって、多様なオノコラーとともに都市のすき間に活動を展開していくことで、ゆくゆくはそれが自立したアートステーションになっていくという見通しを持つことができるようになりました。

「としまアートステーションX」は、こうした取り組みの延長にあります。都市のすき間にアプローチする手法として、すでになんらかの機能や活動を持って存在している場所に、新たな人を入れてみる。そうすることで、既存の機能や活動と

は別のものが生まれるかもしれない。それはアーティストの瞬間や状況だといえるのではないのでしょうか。この発想が、「X」という文字から連想される、何でも代入可能な関数や別々のものがかけ合わされるイメージと呼応して、「としまアートステーションX」ははじまりました。

※1
東京文化発信プロジェクト室は、2015年4月1日よりアートカウンシル東京と組織統合しました。

※2
2013年9月より、一般社団法人オノコロが運営を引き継ぎました。



岸井大輔「としまのふるまい カンパニーふるまい #2 『ファウンデーション』発表会」



中崎透「Practice 大きな家に暮らすための9つの方法」

つくる編

拠点を開くことで人々を育てる

- ・介護福祉施設 × 居間 theater
- ・コラム：木賃アパートを地域に開く（としまアートステーションY）

人々を巻き込む活動を起こす

- ・都心の住まい × 北川貴好
- ・コラム：上池ホームズ計画（としまアートステーションY）

人々をつなぐことで活動を育てる

- ・地域に密着した場 × オノカラー
- ・コラム：作業日（としまアートステーションZ）

活動を持ち込むことで人々を巻き込む

- ・区役所 × 居間 theater
- ・アートステーション × 居間 theater





拠点を開くことで人々を育てる

介護福祉施設 × 居間 theater 「ふくろうの杜 ふらっと文庫」

介護予防に取り組む介護福祉施設の職員とともに、施設内の遊休スペースを活用して、地域住民との交流拠点を開くプロジェクト。職員の問題意識や想いに寄り添い、主体性を引き出し、職員主体の取り組みをアートの視点からサポートすることで、施設内でできることの可能性を拡張し、ゆくゆくは職員主導で新たな取り組みをはじめられる土壌をつくることを目指しました。

何も無いところにゼロからアートステーションをつくるのではなく、すでにある場の持つ機能や、その場にいる人たちの役割に寄り添って、その機能や役割を少しだけ拡張するというこのアプローチは、家や職場も含めた日常生活のあらゆる場がアートステーションになりうる可能性を示唆しています。

場

ふくろうの杜高齢者総合相談センター



ふくろうの杜高齢者総合相談センター（以下、ふくろうの杜）は、高齢者や障害者が入所する介護福祉施設「池袋敬心苑」内にある地域包括支援センターです。地域包括支援センターは、地域と連携することで、高齢者の介護予防や自立生活支援に取り組む機関です。ふくろうの杜は、豊島区内では比較的新しい施設であり、地域住民に施設の存在や機能を知ってもらうことが課題となっていました。

プロジェクトメンバー

ふくろうの杜の職員

ふくろうの杜で見守り支援事業を担当している後藤聡史さんと宇佐美幸子さん。区内に住む高齢者が家の外に出るきっかけづくりや、コミュニティづくりなどを積極的に進め、高齢者向けサロンの開催や、介護予防の講演などを行っています。地域の課題を多世代で話し合う場の必要性を感じ

たことから、自治会長や民生委員、公共施設職員などを招いた、地区懇談会なども開催。後藤さんは他地域のさまざまな事例にも大変興味があり、自身でもリサーチを行っています。

アーティスト

居間 theater



演劇やダンスを背景に持つメンバー（東彩織、稲継美保、宮武亜季、山崎朋）を中心とするパフォーマンスプロジェクト。2013年から東京谷中にある最小文化複合施設 HAGISO を拠点に活動を開始。音楽家や美術家、建築家など多様なジャンルの人々との共同制作や、カフェ、移動図書館、まち歩きツアーなどの「場」と、そこがつくり出す状況そのものともコラボレーションを行い、パフォーマンスのありかたを探っています。人が集まり時間や出来事をともにする「居間」的な、そして「劇場」的でもある場所のことを考えながら活動中。<http://www.imatheater.com>

活動

ふくろうの杜 ふらっと文庫オープニング



■本と出会うパフォーマンス



居間 theater による本を楽しむためのパフォーマンス。文字のない絵本を、音楽とともに眺めるパフォーマンスや、目次を音楽とダンスとともに読むパフォーマンス、ふくろうのかぶりものをしたパフォーマーが選んだ本をお客さんに渡し、3行だけ好きなところを読んでもらうなど、音楽・うごき・ことばを交え、本を紹介しました。

ふくろうの杜が主体となって、池袋敬心苑1階の遊休スペースに、地域の人が自由に出入りできる本棚スペース「ふくろうの杜 ふらっと文庫」を開設しました。日々の業務に支障がない範囲で運営できるよう、平日9時から17時のみのオープンとし、立ち寄った人が自主的に利用できる仕組みとしました。利用方法は、誰かに譲りたいおすすめの本を1冊持ち込み、読んだ感想などをひとこと添えて本棚へ置き、代わりに棚から気になる本を1冊受け取る、というもの。

この文庫のオープニングイベントとして、本を楽しむための音楽・うごき・ことばによるパフォーマンスや、日用品を使ったしおりづくり、施設の見学ツアーなどが居間 theater によるキャストイング、演出により行われました。

■しおりをつくるワークショップ



宇佐美さんが手仕事得意であったことから生まれた企画。りぼんや厚紙などの素材を持ち寄り、宇佐美さんに教えてもらいながら、しおりをつくりました。制作したしおりは各自が持ち帰りました。

■施設の見学ツアー



後藤さんによる施設見学ツアー。普段は入居者の親類などしか出入りしない高齢者福祉施設内を見学し、地域住民や若年層が施設の機能などを知る機会となりました。

■ふらっと文庫の歌



ふらっと文庫の使いかたを説明する歌を作詞・作曲し、発表しました。その様子を映像に収めて会場に設置することで、イベント後も立ち寄った人が見ることができるようにしました。

ふくろうの杜で

作詞：西井夕紀子
作曲：西井夕紀子

ふくろうの杜 ふらっと文庫
おすすめの一冊 もってきて
おすすめのポイント しおりにかこう
すぎなところに はさんだら ああ
本棚のなかに いれましょう
いれたかわりに 気になる一冊どうぞ
お持ち帰りください
ふくろうの杜 ふらっと文庫

プロセス

1. リサーチ

ふくろうの杜の事業や活動を知るため、後藤さんが企画する在宅高齢男性向けのプログラム「おとこのサロン」を見学しました。ここでの体験によって、後藤さんたちが日常的に接している高齢者の像がはっきりとしてきました。また、町会、社会福祉協議会、福祉事業者、公共施設職員などの情報共有の場として、ふくろうの杜が開催している地区懇談会に出席し、地域内での問題意識や、その解決に向けて誰がどのように動いているのかを知る機会を持ちました。

2. ミーティング

プロジェクトを急速に進めて疲れるのはよくないという意識が後藤さんたちにあったため、隔週ペースでミーティングを行いました。最初は彼らの問題意識や興味を知りに専念しました。毎回、としまアートステーション構想での区民を巻き込む取り組みや、介護や福祉とアートや場づくりをかけた各々の事例を参考することで、新たな視点を提供しつつ、介護や高齢者を取り巻く状況や課題をヒアリングし、お互いの持っている情報や視点をざっくばらんに交換しました。そのなかで、高齢者の居場所づくり、地域におけるふくろうの杜の認知度向上、相談窓口機能を高齢者以外にも周知する必要性、多世代交流の不足といった課題が表面化し、言語化されていきました。

こうしたキーワードから、まずは施設を外部に開くことを考えはじめました。それまでは夏祭りやバザーなどのイベントのときだけ開放していましたが、日常的に開く場所をつくることができなかと考えました。そこで、暗く隔たった印象があり、遊休スペースとなっていた1階ロビーエリアを開いて使うことを検討しはじめました。としまアートステーションZでの事例を踏まえながら、地域の人気が気軽に立ち寄れる居心地のいいスペースとはどんな場所か、立ち寄るきっかけをどのようにするかということも話し合いました。

3. オノコラーへのヒアリングと施設見学

後藤さんは、高齢者の居場所や多世代交流が不足している一方で、中学生から70代まで文字通り老若男女がいるオノコラーに関心を示していました。また、介護福祉施設に対して若年・中年層が抱えている印象について知りたいと考えていました。そこで、オノコラーへのヒアリングと施設見学会を実施しました。参加者からは、1階ロビーの活用案や雰囲気に関する意見が出ました。Zで前期高齢者のための多世代交流の場づくりを試みていたオノコラーからは、本を持ち寄ってプレゼンし合う会などが提案されました。

4. ふらっと文庫開設

本を持ち寄るという案を受け、後藤さんたちに意見を求めたところ、1階ロビーエリアに本棚を設置して、本を交換できる場をつくるというアイデアが出てきました。ただし、要らない本ばかり集まってしまうよう、おすすめのポイントを書き込むシステムを導入。そして、施設内の各部署に開設のお知らせとともに本の持ち寄りをお願いしました。関わりしろがあることで、他の部署の職員も興味を持ってくれました。

空間には大きく手を加えず、電球をつけて明るい雰囲気をつくることなどを心がけました。また、サインボードの設置、地域情報や介護情報が手に入るチラシラックの整理、奥まって目に入らなかった相談窓口までの視界を広げるなど、施設に立ち寄るきっかけづくりから、本来の目的である相談につなげることを意図した動線をつくりました。

そして、地区懇談会の出席者に向けて内覧会を行い、地域への周知や本の持ち寄りをお願いしました。また、居間 theater によるオープニングイベントを行うことで、イベントをきっかけに施設を知る地域住民を増やし、若い世代の人も気軽に立ち寄れるスペースであることを知らせていきました。

年表

2014年9月	後藤さんがZに来訪、介護予防に関する課題や後藤さんの想いを聞く
2015年3月	リサーチ開始
4月	としまアートステーションXの一環として、施設内でプログラムを実施することになる
6月～	後藤さんたちとのミーティングを隔週で実施
10月	オノコラーがふくろうの杜を見学 介護施設と地域の接点のつくりかたについてオノコラーの意見をヒアリング 文庫を設けることで地域との接点をつくるというアイデアが出る
11月	遊休スペースを活用した交流拠点整備に関する打ち合わせ・準備 オープニングイベントの打ち合わせ・準備
2016年1月	ふくろうの杜 ふらっと文庫内覧会 オープニングイベント開催
3月	としまアートステーションX終了 後藤さんたちがふらっと文庫を継続して運営していくことになる

エピソード

事業がはじまる前から、通常業務と両立して続けられる範囲やバランスの取りかたについて不安に思う声や、後藤さんからよく挙がっていました。その後も度々ミーティングの議題に挙がり、「構えすぎずにやろう」「自分たちが疲れてしまっただけの意味がない」という話をしていました。他の職員も巻き込みたいけれど、迷惑もかけたくないというジレンマがあったのでしょうか。

夏を過ぎた頃から、具体的に施設内で何ができるか考えていくなかで、職員の趣味や特技を活かしたり、職員自身が楽しめることを組み込んでいくというイメージを持てるようになりました。その頃から、気軽に企画に対して意見する職員が増えはじめました。担当者が周りの職員を巻き込ん

でいけたこと、そして、巻き込まれた職員も、自分ごととして楽しみながら気軽に何かを起こそうという気になっていったことで、当初の不安が和らいでいったようでした。

としまアートステーション構想との事業が終了した後も、「ふらっと文庫」は継続し、自立して運営されています。本を読めるように切れていた電球を替えて暗い雰囲気を解消したり、夏には涼み処として麦茶をふるまったり、シーズン別に職員や施設利用者がつくった飾りつけがされていたりと、自分たちでできることを少しずつ試しているようです。

実施データ

■ふくろうの杜 ふらっと文庫オープニング

日時：2016年1月30日（土）11:00-16:00

会場：池袋敬心苑 1F

来場者数：41名

出演者・スタッフ：東彩織、宇佐美幸子*、後藤聡史*、西井夕紀子、山崎朋

*ふくろうの杜 見守り支援事業担当

企画・制作：居間 theater

(東彩織、稲継美保、宮武亜季、山崎朋)

としまアートステーション構想事務局

■コラム

木賃アパートを地域に開く
(としまアートステーションY)

2014年度に実施した「としまアートステーションY(以下、Y)」では、民間所有の遊休スペースを、地域の創造拠点として活用するプロジェクトを行いました。このプロジェクトには、人が集まって活動できる空間を整備するというハードに関する側面だけではなく、その拠点や活動の担い手を育て、地域の協力者や理解者とのつながりを広げるというソフトに関する側面もありました。

プロジェクトをはじめるにあたって、私たちが目指した最終的な私たちは「区民が主体者になる」ということでした。そのため、リサーチではただ空間としての物件を探すだけではなく、地域に開かれた創造拠点をつくるという趣旨に賛同する人や、その担い手となりうる人も探していました。そんなときに出会った山本山田は、上池袋に点在する木造賃貸(以下、木賃)アパートを、

ギャラリー、カフェ、アトリエ、ゲストハウスなどに転用することで、住みだけではない木賃アパートの価値をつくるというプランをあたためていた若い夫婦でした。そして、その最初の事例として、自身が運営する山田荘を地域に開こうと考えていたところだったのです。

私たちは、まず、山本山田のやりたいことやその背景にある動機をヒアリングし、それに沿うかたちで実施内容とお互いの役割を一緒に決めていきました。としまアートステーション構想が描いたプランに区民が参加するのではなく、区民主体の活動をとしまアートステーション構想がサポートする関係をつくらうと考えたためです。このプロジェクトにおいて山本山田は、プロジェクトに関わるアーティストや、オノコラー、イベントの来場者を迎え入れたり、町内会や近隣の施設



との関係づくりをするなど、拠点の運営者としてのふるまいを経験していきました。それから2年経った2017年現在、山本山田が運営する拠点はもうひとつ増え(くすのき荘)、当時関わったオノコラーをはじめとする区民たちとともに、地域に根ざした活動を継続しています。

ここでのとしまアートステーション構想の役割は、彼らのように、やってみなければ、まだはじめられていないことがある主体者の最初の一步を後押しすることでした。一緒に場を開いたり運営したりしてみることもその手法のひとつです。そこに、アーティストやオノコラーをはじめとする他者が新しい視点を持ち込むことで、自分たちだけでは思いつかなかったアイデアが生み出されます。それは、主体者にとって新たな発見であると同時に、戸惑いや困難をもたらすものである

かもしれません。上述のケースで私たちが行ったサポートは、その両面をバランスよく経験できる環境をつくり、ときに相談に乗りながら活動に伴走することでした。

「介護福祉施設×居間 theater」も、Yと同様の手法によって実現したアートステーションだといえます。「ふらっと文庫」を開くことを通して、場の担い手が生まれ、その後も独自の展開が続いています。

写真：①山田荘と母屋の間につくったデッキ ②としまアートステーションYのパートナーである山本山田 ③デッキ制作の相談をする山本さんと中崎透 ④建築家である山本さんが引いたデッキの図面 ⑤山田荘外観 ⑥完成直後のデッキには山田さんのお母さんによる生け花が ⑦デッキ制作に参加するオノコラー ⑧近隣住民を呼び込むため工夫も欠かさない ⑨山田荘内観



人々を巻き込む活動を起こす

都心の住まい × 北川貴好 「高層及び低層集合住宅一帯多層化芸術計画」

都心に急増しているタワーマンションと、その住民にアプローチすることで、地方都市や過疎地域における従来型とは異なる、都心型のアートプロジェクトの可能性を探るプロジェクト。タワーマンションという環境や風景、そこに住む住民の生活、コミュニティや活動のありかたについてリサーチし、「都心の住まい」に切り込むプログラムを実施しました。

特定の拠点を持たず、特定のグループを形成することもなく、「都心の住まい」をキーワードに、その都度、人を巻き込んで活動を生み出し、また解散するというスタイルは、中心のない地下道でつながれたタワーマンション群という都心の風景を彷彿とさせるようなアートステーションのかたちを提示しています。

場

都心の住まい



東京都心における特徴的な住まいのひとつとして、タワーマンションがあります。そこで暮らす人々の生活やコミュニティも、タワーマンションという空間ならではのありかたを示すでしょう。

全国各地でアートプロジェクトが行われている現在、地方都市や過疎地域、あるいは都内でも、下町のように地域特性の強いエリアで行われるアートプロジェクトのつくりかたは、そこで扱う地域的・社会的課題や資源とともに、ある程度、出揃っているように思われます。としまアートステーション構想においても、歴史的なまち並みが残る雑司が谷や、町内会や近隣住民との関係が強く残る上池袋を拠点に、プロジェクトを起こしてきました。

一方で、池袋駅周辺のタワーマンションに象徴される住まいかたも豊島区のひとつの要素であり、そこで暮らす人たちも当然に豊島区民です。そこにアートプロジェクトはどのようにアプローチできるのか、という問いから、「都心の住まい」という場を設定しました。

アーティスト

北川貴好



1974年大阪府生まれ。1999年武蔵野美術大学建築学科卒業。既存のプレハブ家屋に無数の「穴」を開けたり、公園に大量の古タイヤを持ち込むなど、環境や建物自体に手を加え、空間そのものを新しい風景へと変換させていくインスタレーション作品を制作している。一方、2011年デジカメの写真を使った町遊び「30秒に一回みつける写真道場!!」を開始。1,000枚を目標に写真を撮り、即編集、即発表という形式で、全国各地で道場を行う。

構想メモ

ドラえもんはどこでもドアを未来の道具として描いていますが、そもそもドアは、どこでも行ける第一歩としてあります。どこでもドアのその一歩先にある風景は、自分の住んでいるまちを通さずに、別の場所に行けるところがどこでもドアのよいところでしょう。そう考えると、すでにもうどこでもドアは存在しています。

駅直結のタワーマンションは、まちを通過せずにいろんな場所に行けます。駅近くに住むこと＝利便性が高いこととされた結果、多くの人その利便性を獲得するためにつくられた駅直結のタワーマンション。およそ500世帯住むこのマンション。500の扉の先にあるのは、まちではありません。ドアの向こうにつながっているのは都市空間なのです。廊下、エスカレーター。その先には、地下通路、地下鉄、乗り換えのためのショッピングモール、そして高速鉄道、あるいは飛行場。移動するための空間、どこにも行くための空間とつながっているのです。そう、扉のむこうは、すでにどこでも空間なのです。

仕事に追われた結果、女性の社会進出で共働きが増えた結果、老後の移動の利便性を考えた結果、都心に住むことが重要視された。その結果駅近くに住む。そして、発達した交通網は、いろんな場所に行く時間を短くし距離感を短くしようとします。

生活感あふれるまち並みは、人々の生きるための営みの集積です。低層の木造密集住宅は、そのなかで、いろんな要素が混じり合い、その営みの集積を歩くことで感じるができます。しかし、住むために特化した巨大な構築物は、住むもの以外を拒絶し、その生活の営みは外から見えづらいものになっています。

だが一方、住んでいる人の視点、タワーマンションのウチから外れると、なにが見えるのでしょうか？ 窓の風景は人々の生活の営みではなく、まちが生きていることを感じます。車が流れて行く光景、マンションやビルの電気の点灯、移り変わる空の下、多くの建築の間を移動し、都市を成立させるための細胞のひとつとして、人々や車が動き回っていることを感じます。ただ、俯瞰的な窓からの光景、どこでも行ける扉からは、自分が住んでいる生活空間の全体像が見えてきません。都市とつながっているひとつの部屋あるいは細胞のようなものとしか認識できません。ぼんやりとした、住む人の家の像。いったい自分の住んでいる家のテリトリーはどこまでなのか？ タワーの建築が、自分の家と言いきれるのでしょうか？ 自分の家だけでなく、自分のまちは一体どこなのか？ あるいはどこまでなのだろうか？ どこでもドアに自分の家の扉が近づけば近づくほど、振り返るべき自分の住まいが見えなくなっていっているのです。

タワーマンション。そのタワーマンションの像を追うことで、現代の都市に住まう家の像をたどることができるのではないだろうか？ ハイ＝高いことと、ロー＝低いことのギャップ。美術や芸術、文化のなかにもそのハイとローのギャップが存在します。タワーマンションおよび低層一帯を絡ませ合い、何重にも重なる線をドローイングするように空間の実態をさぐっていく。そうして、いまある生活の像をさぐっていく。そのための実験。それが、高層及び低層集合住宅一帯多層化芸術計画 (high and low apartment multi-mix-art-plan) なのです。

7月3日(金) 雨 新幹線にて

北川貴好

活動

高層及び低層集合住宅一帯多層化芸術計画



■ワークショップ



「都心の住まい」について探る複数のワークショッププログラムを実施しました。タワーマンションの設計者や仲介業者へのヒアリングと、そこで得られた気づきについてのディスカッションや、オノカラーそれぞれの「住まい」

に対する原風景や視点を共有する会を実施しました。また、明治大学木寺研究室の学生が、都心における暮らしかたについて文献のサーチやフィールドワークをしました。このワークショップによって、集合住宅におけるプライベートの領域の広がりかたや、コミュニティ形成のありかたなどのトピックが浮かび上がりました。アーティストは展示会に向けて「都心の住まい」に対する見識やイメージを、多様な視座を得ながら膨らませ、参加者は多様な切り口から自分にとっての住まいとは何かを問いかける場となりました。

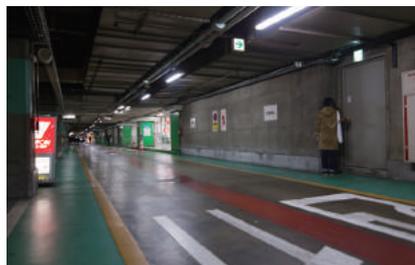
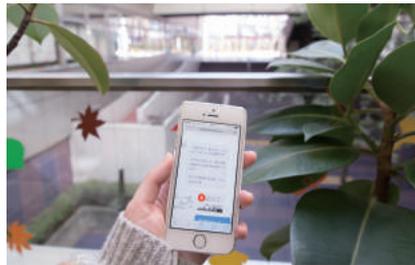
建築的視点を持つ北川貴好と都心型のアートプロジェクトのかたちを探るプロジェクト。「都心の住まい」というキーワードから派生して、タワーマンション、高層、地下、都市、アート、暮らしなどのトピックを設定しました。それぞれについて、その都度異なるメンバーとともに、ワークショップやフィールドワーク、展覧会など、多様な活動を行いました。そのすべての活動が高層及び低層集合住宅一帯多層化芸術計画です。

■タワーマンショントリエナーレ



豊島区内のタワーマンションのパーティールームに「活動」を持ち寄るホームパーティをオノカラーとともに実施しました。共通の「ともだち」の家招かれるという体験を、タワーマンションの特徴である豪華な共用部で行うことで、「都心の住まい」におけるプライベート空間とパブリック空間に意識を向ける機会となりました。また、参加者が絵画や音楽、写真、食、謎解きなど、自分なりのアートを持ち込み紹介し合うことで、互いの活動を知り合う場となりました。

■北川貴好展「地上階には、つながらない邸宅」



高層及び低層集合住宅一帯多層化芸術計画の活動やリサーチで抽出されたタワーマンションの空間的要素を再構成し、都市のなかに仮想の建築を設計することで、都市と住まいの関係を提示する回遊型の展覧会を実施しました。鑑賞者は、スマートフォンなどのタブレット端末からウェブサイトにはアクセスし、ウェブサイトの指示に従いながら、池袋駅を中心とする地下空間を巡りました。家が地下空間によって他の都市と直結しているという「都心の住まい」の特徴を示唆する音声やテキストを読みながら、まさにその地下空間を歩くことで、日常の空間体験との差異が浮かび上がりました。

年表

2015年4月～5月	明治大学木寺研究室によるリサーチ
5月～6月	オノカラーとのワークショップ
5月～7月	タワーマンションの見学、設計事務所へのヒアリング
6月	明治大学木寺研究室によるリサーチ発表会
7月	「高層及び低層集合住宅一帯多層化芸術計画」構想メモを執筆
9月	北川貴好展「地上階には、つながらない邸宅」の企画立案開始
	タワーマンショントリエンナーレのアイデア出し
10月	タワーマンショントリエンナーレ実施
10月～2016年1月	北川貴好展テストプレイ・つくり込み
2月	としまアートステーションZ内の設営・北川貴好展最終テストプレイ 北川貴好展「地上階には、つながらない邸宅」開催

実施データ

■ワークショップ

日時：2015年4月～7月

明治大学木寺研究室との基礎リサーチ4回、
オノカラーとのワークショップ3回、
フィールドワークとヒアリング4回

参加者数：延べ115名

参加オノカラー：天羽絵莉子、大木教由、緒方彩乃、
亀山遥平、関智一、菱木夢子、森久憲生

協力：明治大学木寺研究室

(相田龍一、西村仁志、佐藤智晃、清見顯祐、土屋人士、
小寺悠太、北村光、渡部紗也、船津和隆、新井晶子、上野洋、
橋本菜由子、益山友博、徳竹詩織、元木大夢、佐藤未来、
田中俊光、鈴木弓莉、菅谷匠司、砂村香奈実)

■タワーマンショントリエンナーレ

日時：2015年10月26日(月)

会場：豊島区内タワーマンションのイベントスペース

参加者数：23名

出展者・発表者：大木教由、小笠原綾子、加藤裕士、
亀山遥平、木村一平、児玉尚子、野村はる、関智一、野
口真知子、野村松代、菱木夢子、村方光沙子
(以上オノカラー)

■北川貴好展「地上階には、つながらない邸宅」

日時：2016年2月25日(木)～3月1日(火)

平日 14:00～19:00 / 土日 12:30～17:30

会場：としまアートステーションZ、池袋エリア各所

来場者数：144名

会場構成：北條元康

記録写真：富田了平

サポートオノカラー：小笠原綾子、木村一平、村方光沙子

企画・制作：北川貴好、
としまアートステーション構想事務局

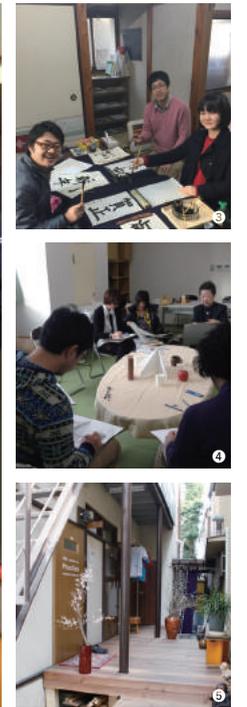
■コラム

上池ホームズ計画
(としまアートステーションY)

「アートステーション」という言葉から、どんなものを想像しますか。「ステーション」というからには、なんらかの場所、さらにいえば常設の拠点のようなものを思い浮かべるかもしれません。私たちも最初はそのようなイメージを持ちながら、豊島区内に区民主体の創造拠点を増やすことを目指してプロジェクトを進めていました。

そんななか「アートステーション＝常設の拠点」という前提を大きく揺さぶる出来事がありました。2014年度に「としまアートステーションY」の一環で実施した、中崎透による「上池ホームズ計画」です。中崎は、トイレ共同風呂なしの木質アパートでの暮らしが、銭湯やコインランドリー

や定食屋など、まちが家の機能を補完することによって成り立っていたことに着想を得て、まち全体を使うことでアートステーションを成立させることを試みました。具体的には、山田荘という木質アパートに軸足を置きながらも、そこだけに留まらず、公園、小学校、公民館、路地などで小さな活動を複数展開していきました。上池ホームズ計画の特徴は、場所を固定せず、メンバーも固定せず、「上池袋にあるさまざまな場所の文化的な使いかたを探る」というゆるやかなテーマのもとで、その都度興味を持った人が集まっては協働し、活動が終われば解散するという動きかたをした点です。それによって、地元の小学生サッカーチーム、盆栽屋、近隣のオカリナの先生と退職してオ



カリナをはじめた生徒、駅員、美大生など、多様な人たちと接点を持つことができました。

このような活動の総体をアートステーションと捉えることによって、「アートステーション＝山田荘のような常設の拠点」という発想から、「アートステーション＝小さな活動の集合、あるいは、そのような活動の連鎖を生み出す仕組み」という発想へと、その概念が拡張されました。さらに、この経験は、非常に強い目的を共有する固定のメンバーによる組織立った活動とは異なり、ゆるやかな人の集まりかたや関わりかたによる活動がありうるということを、私たちに気づかせてくれたのです。

このようなアートステーション観は、「都心の住まい×北川貴好」にも見出すことができます。そこでは、軸足を置く場所すら持たず、「都心の住まい」というキーワードにそれぞれが触発され、それぞれの活動を行っています。この2つのプロジェクトは、飛び火するムーブメントのようなものであり、アーティストの視座がその火付け役として機能したといえるのかもしれませんが。

写真：①小学校の多目的室で実施した音楽会「上池ミュージックアワー」
②オープンハウスの一環で行ったまち歩き「かみいけ見学ツアー」
③山田荘で実施した「2015新春書き初め会」④区民ひろばで実施した「中崎透のYYデッサン教室」⑤中崎透展「Practice 大きな家に暮らすための9つの方法」



人々をつなぐことで活動を育てる

地域に密着した場×オノコラー「オノコラー企画発表会」「オノコラーフェス 2016」

としまアートステーションZで生まれた区民主体の活動を、地域のさまざまな場に展開することで、地域に根ざしたアートステーションをつくり出すことを目指すプロジェクト。としまアートステーション構想のプロジェクトメンバーであるオノコラーが主体となって、豊島区内にある地域に密着した場を舞台に、それぞれのアートステーションのかたちを探りました。2015年度は、豊島区内の公共施設とオノコラーのアイデアのマッチングを試みました。2016年度は、オノコラーが運営する民間のスペースで、複数の企画が一堂に会するイベントを実施しました。

場を開く人、企画を思いつく人、他の人の企画をサポートする人などが交わることで活動が立ち上がっていく様子は、活動体としてのアートステーションを考えるうえで異なる役割の人々のつながりが重要であることを示しています。

場

みらい館大明

廃校になった小学校の校舎を利用した生涯学習施設。さまざまな講座、ワークショップ、イベントを実施したり、会議室、音楽室、体育館などを、非営利団体に貸し出しています。また、若者支援事業の一環として、若者を中心とするさまざまな人たちが、気軽に集まったり自由に活動を持ち込んだりできる「ブックカフェ」も運営しています。

区民ひろば高南第一

小学校区を基礎単位とする、あらゆる世代の地域活動拠点。高齢者の健康増進、子どもの遊び場や保護者の交流、区民の地域活動や生涯学習などに関するプログラムを実施したり、会議室などを区民を主とする非営利団体に貸し出しています。Zから徒歩圏内にあり、オノコラーが秋のお祭りの運営を手伝いに行くなどの交流がありました。

中高生センタージャンプ長崎

主に中高生を対象とする児童館。学習、音楽、ダンス、調理などの活動や、友人との交流ができる場を提供し、中高生自身による自主的な活動や、居場所づくりを支援しています。職員の他にも、地域の特技を持った大人たちが出入りしており、中高生の相談に乗ったり活動をサポートしたりしています。

プロジェクトメンバー

オノコラー

としまアートステーション構想に関わりながら、自分なりのアートステーションを見出し、ゆくゆくは自発的な活動をはじめの人たちのこと。やりたいことに向かって自ら動く、おのずとこころがる、そんな人たちの総称です。2014年度から公募をはじめ、2017年3月現在、述べ137名（実

くすのき荘

元倉庫兼住居だった木造の空き家をDIYで改装してできたスペース。2014年度の「としまアートステーションY」のパートナーであり、現在はオノコラーでもある山本山田が、2つめの拠点として立ち上げました。クリエイターの住居やアトリエである山田荘（としまアートステーションY）と連動して、14名のメンバーのシェアラウンジや作業場、イベントスペースとして運営されています。

Planethand

オノコラーが運営するハンドメイドの雑貨屋。アートによる商店街の魅力発信に積極的で、商店街の個人商店にさまざまなアーティストの作品を展示していくプロジェクトの拠点にもなっている店です。

人数80名）が活動しています。プロジェクトやイベントを自分で立ち上げることに興味がある人、多様な人が集まる場の運営に興味がある人、地域で何かやってみたくはいいけれどモヤモヤしている人、家と職場以外の活動の場を求めている人など、興味関心や経験はさまざまです。

活動 (2015 年度)

オノコラー企画発表会



豊島区内の3つの施設、みらい館大明、区民ひろば高南第一、ジャンプ長崎の職員と、としまアートステーション構想関係者に向けて、オノコラーが企画案をプレゼンテーションする会を開きました。8名による10個の企画案が発表されました。参加者はそれぞれ票を持ち、自分の施設でやってみたい企画や自分が参加したい企画に投票し、得票が最も多かった「ぶつ・ぶつ交換会」を実施することになりました。

■ぶつ・ぶつ交換会



オノコラー企画発表会で選ばれた「ぶつ・ぶつ交換会」を、みらい館大明と区民ひろば高南第一で実施しました。文房具や写真など、各回のテーマにそってモノを持ち寄り、それによつた想いやエピソードについて対話しました。

■演劇公演「お家のお話」参加型



誰かが暮らしていたかもしれない、自分も暮らしていたかもしれない家の、あるかもしれない「日常」を見つめる参加型の演劇。事前に関取図から演劇をつくるワークショップを実施し、その参加者たちによって上演されました。上演後には、観客を交えた座談会も行いました。

■「おのずのダンス」発表



自らの道を歩む人々を応援したいというオノコラーの発案で、東長崎の商店街の人々とともに、「弾む心に訪れる小さな芽吹き」をテーマとするオリジナルの歌とダンスを制作し、発表しました。東長崎での制作秘話を語る座談会も行いました。

活動 (2016 年度)

オノコラーフェス 2016

オノコラーによるさまざまな活動と、それぞれのやりたいことにトライ・アンド・エラーしながら取り組む彼らの姿を一挙に見せる2日間のフェスティバルを開催しました。シェアスペースや店舗などの活動の場を持つオノコラーと、活動のアイデアを持つオノコラーをマッチングさせることで、また、多様な可能性を持った彼らの存在を広く発信することで、としまアートステーション構想が終了した後も続くネットワークを残すことを目指しました。

■現代アート展示「雑居」



オノコラーの呼びかけで集まった総勢31名の作家が、「新しい動きや芽吹き、ここで何かが根づき、混じり、つながり合う」ことをテーマに、映像・絵・インスタレーション・パフォーマンス映像など、現代美術のグループ展を行いました。

■OPEN CLOSET



衣服と物語が循環する場をつくる企画。クローゼットに眠っている、もう着ないけれど捨てられない衣服を、それによつた物語や思い出とともに集め、リメイクしたり、参加者同士で交換したりできる場をつくりました。

■レコードを聴きながら昭和を語る会



懐かしいレコードをかけながら、お気に入りの駄菓子を持ち寄り、昭和について語り合う会を行いました。昭和の時代を知る人も知らない人も、レコードを見たことがある人もない人も集い、世代を超えた語らいが生まれました。

■「オススメまちあるきルート」配布



オノコラーひとりひとりの視点で、豊島区のお気に入りスポットや、それらをめぐるルートを紹介する冊子を制作し、配布しました。選ぶ場所はもちろん、ルートの表現の仕方それぞれ異なっており、個性が集まる冊子になりました。

■「幸せになる 銀ふくろう」展示



オノコラーが、としまアートステーションZの来場者に呼びかけて集めたペットボトルや、寄付されたアルミはくを材料にしてつくったオブジェを展示しました。

■「自分達で作る LED イルミネーション」展示



電子工作が得意なオノコラーを中心に、やってみたい人たちが集まってつくった作品。イルミネーションのかたちも点灯パターンもすべてオリジナルでつくられており、点灯すると顔の表情のように変化します。

■活動紹介



オノコラーの多様な活動を紹介するトーク企画。どんな活動をしてきたのか、印象に残ったエピソード、それぞれにとって「オノコラー」とはなんだったのかを話してもらいました。多様なエピソードが集まることで、オノコラーの輪郭が見えてくるトークとなりました。

■オープニングパーティ



フェスに関わるオノコラーと来場者の交流の場。企画者には自分の企画を説明してもらいました。

プロセス

1. フィールド見学

企画を実施する候補地をオノコラーと見学に行きました。行ったことがある人もない人も、候補地を知っている人もそうでない人もさまざまですが、多様な視点を持ったメンバーで行くことを大切にしました。候補地を見学し、特徴を捉えることはもちろん、その場所で日々過ごしている職員や運営者と話すことで、どんな人がそこを利用し、どのような出来事が起きているかに目を向けてもらいました。

見学後は、それぞれが発見したこと、感じたこと、素敵だと思ったことなどを付箋に残して、見学に行けなかった人とも共有できるようにしました。それをとしまアートステーションZに掲示することで、他のオノコラーや来場者からの新たな視点も追加されていきました。

2. 企画のアイデア出し

候補地の見学を踏まえ、自分がやってみたいこと、誰かの特技を活かして一緒にやってみたいことなどを、ブレインストーミングしました。どんなアイデアを思いつく人もいれば、他の人のアイデアをよりよくする意見を言う人、他の人のアイデアに感化される人など、オノコラーそれぞれの個性が見えてきました。

3. 企画のブラッシュアップ

アイデア出しで挙がったキーワードをもとに企画シートを埋めていきました。この企画シートは、5WIHを埋めていくことで企画概要の整理ができるようになっていきます。企画シートの途中経過を発表し合い、オノコラー同士が付箋でコメントをつけました。そうすることで、自分だけでは見えてこない多角的な視点を実感できます。企画に賛同する人は「いいね!」や「一緒にやりたい」といったコメントをつけることで、チームをつくっていきました。

4. 準備・プレ実施

ブラッシュアップされた企画を具体化するため、準備とプレ実施を重ねました。会場となる施設の職員や、チームメンバーと打合せを重ねたり、としまアートステーションZで本番さながらに企画を実施してみたりしました。具体的にすることで見えてくる問題点を修正していきました。

年表

2015年5月～7月	豊島区内の公共施設のフィールド見学
6月	企画のアイデア出し
8月～9月	企画のブラッシュアップ
10月～11月	オノコラー企画発表会
12月～1月	準備・プレ実施
2016年2月21日・27日	「ぶつぶつ交換会」実施
9月	「オノコラーフェス2016」企画のアイデア出し
10月	「オノコラーフェス2016」会場の見学、企画のブラッシュアップ
11月	準備・プレ実施
12月10日・11日	「オノコラーフェス2016」実施

エピソード

としまアートステーションZではじまったオノコラーの活動は、想像以上に盛り上がり、多様化していました。彼らの活動が地域で展開されていくことが、アートステーションを増やすことなのではないか。そう考えたことがきっかけで、「地域に密着した場×オノコラー」がスタートしました。

2015年度は、公共施設とオノコラーのアイデアのマッチングを試みました。企画発表会に参加した施設職員からは「こんなに多種多様なオノコラーがいることに驚いた。人材バンク的にオノコラーの企画とさまざまな施設がマッチングしていく可能性を感じた」「実現したい企画ばかりだった。自分の施設でもこのような会が定期的に起きたらいいなと思いました」という反応がありました。新しいアイデアや魅力的な人を求めている区内の施設とオノコラーのマッチングが起きる機会をたくさんつくることに可能性を感じました。

2015年度の企画発表会では、提案のあった10企画のうち、実施する企画をひとつ選ぶというかたちをとりました。しかし、選ばれなかった残りの企画のなかにも、施設側が興味を持ってくれたものがありました。そのうち4つの企画は、発表会后、オノコラーそれぞれの力によって実現されています。



「オノコラーフェス2016」会場のくすのき荘

2年目となる2016年度は、年度内の事業終了が決まったことを受けて、将来的にアートステーションが生まれる可能性を増やすだけではなく、事業終了後も、地域に根ざして活動していくイメージや手応えを、オノコラー自身に体感してもらいたいと考え、目に見えるかたちで成果を残すことを目指しました。

オノコラーのなかには、くすのき荘やPlanethandのように、すでに自分の場を持ち、地域に根ざした活動を展開している人もいました。そういった人と、企画のアイデアを持っているオノコラーや他の人の企画をサポートしたいオノコラーを結びつけていくことで、「オノコラーフェス2016」が実現しました。イベント後、会場となったふたつの場所では、新たなチームや活動が生まれています。フェスを機に生まれた企画が、地域の人たちの手によってどんどん花開いているのです。



「オノコラーフェス2016」会場のPlanethand

実施データ

■オノコラー企画発表会

日時：2015年11月28日（土）19:00～21:00

会場：としまアートステーションZ

参加者数：21名

発表者：市川良介*、大木教由*、小笠原綾子*、かとうゆか*、岸本正寿*、木村一平*、廣瀬大*、森久恵生*

■ぶつぶつ交換会

第1回

日時：2016年2月21日（日）15:00～17:00

会場：みらい館大明

来場者数：20名

第2回

日時：2016年2月27日（土）13:30～15:30

会場：区民ひろば高南第一

来場者数：20名

■オノコラーフェス2016

日時：2016年12月10日（土）、11日（日）

12:00～18:00

会場：くすのき荘、Planethand

来場者数：延べ463名

現代アート展示「雑居」 @くすのき荘

企画：野村はる*

出展作家：間庭裕基、加藤さやか、田中萌子、香田亜弓、福家由美子、内田愛理、An yeji、稲田明日香、杉野晋平、藤本まり子、栗原麻緒、山崎菜奈、中村留津子、田中みさよ、高橋宏忠、高橋壘、野口竜平、川上運か、佐久間洗、田田野、大木レイ子*、若菜沙耶、チキン・コルマ、ゆのみか、濱田明季、三原回、野村はる*、かみむらみどり、SaeTakahashi、yayabias、小野寺ひかり*（順不同）

演劇公演「お家のお話」参加型 @両会場

企画：方瀬りっか*

出演（くすのき荘）：方瀬りっか*、千葉ゆり、永井里奈

出演（Planethand）：方瀬りっか*、木川るり子*、齋藤英一*

活動紹介 part1 @くすのき荘

発表者：天羽絵莉子*、五藤真*、末広尚義*、廣瀬大*、山本山田*

活動紹介 part2 @ Planethand

発表者：大木教由*、小野寺ひかり*、田中秀康*、やしまかずこ*、山本山田*

オススメまちあるきルート @両会場

企画：大木教由*、大木レイ子*、方瀬りっか*、児玉尚子*、高橋ゆき*、やしまかずこ*

ルート提案：内田壮哉*、大木教由*、小笠原綾子*、小野寺ひかり*、K子*、方瀬りっか*、木川るり子*、五藤真*、高橋ゆき*、なおだま*、百瀬幸枝*、やしまかずこ*、渡部丈徳*

OPEN CLOSET @ Planethand

企画：田村香織*、小笠原綾子*

「幸せになる 銀ふくろう」展示 @ Planethand

企画：大木レイ子*

「自分達で作る LED イルミネーション」展示 @ Planethand

企画：末広尚義*

「おのずのダンス」発表 @ Planethand

企画：小野寺ひかり*、森岡悠翔*

協力：やしまかずこ*

振付：Chico

音楽：竹田克也

レコードを聴きながら昭和を語る会 @ Planethand

企画：市川良介*

記録映像・写真：冨田了平

当日運営：

天羽絵莉子*、小田嶋景子*、神田亜利紗、かとうゆか*、五藤真*、末広尚義*、高橋ゆき*、服部実*、道本有香、山本直*、山田絵美*、やしまかずこ*、柳スルキ

企画・制作：としまアートステーション構想事務局

*オノコラー

■コラム

作業日
(としまアートステーションZ)

としまアートステーションZでは、2014年度より、さまざまなコミュニティが共存し、それを越境して人と人が出会う場づくりを行ってきました。そのような場をひとりひとりが主体的につくりはじめられるように、Zでは「人々が集まり、個性が現れ、つながる」というステップを意識しました。

多様な人に開かれた場をつくるために重要な役割のひとつを担ったのが、プロジェクトメンバーであるオノカラーです。性別も年齢も興味関心も多様なオノカラーがこのプロジェクトに参加し、いろいろなジャンルの活動をZで行いました。彼ら自身やその活動は、さまざまな人々をZに呼び込むフックとして機能しました。そんな来場者たちの個性が現れてくるように「作業日」というプログラムを設けました。これは、目的がはっきり決まっている人も、まだ決まっていない人も、自分なりに試行錯誤できる場を提供するというものです。工作などのようにモノをつくる作業を持ち込む人もいれば、読書や考えごと、おしゃべりなどのかたちにはならない作業を持ち込む人もいました。彼らの試行錯誤に伴走するなかで見えてきたのは、「オノカラー」といってもさまざまなタ

イプの人がいるということでした。いくつか例を挙げてみます。

●自分で企画する

自分の好きなことや得意なことを活かして自らアイデアを出し、企画を考える人。今まで自分がやってきたことを発展させたり、「こんなことやってみたかった」を実現したり、出てくるアイデアはさまざまです。

●他の人が考える企画のサポート・コラボレーションをする

他の人が考えたアイデアの種を一緒に育てたり、そこに自分の得意なスキルを重ねて実現したりする人。ひとりではなかなかはじめられないことも、支援したり応援したりする人がいると、どんどん盛り上がっていきます。

●多様な人が集まる場づくりをする

多様な人がともにいる場、交わる場づくりを行う人。来場者に気さくに声をかけ、居やすい場をつくったり、いろんな人が関わるためのきっかけをつくったりします。日常の些細な出来事を楽し



み、大切にすることで魅力的な場が生まれます。

●自分で場を開く

自分に身近な場所を開き、人が集い、ことが起きる場をつくる人。場所は大小さまざまですが、身の丈にあった場をどうやって開くかが大事です。

タイプの異なる人々をゆるやかにつなぐことで、個人作業は活動体へと発展し、どんどん豊かになっていきました。アートステーションをつくるということは、こうした活動体を地域に根付かせることです。そのためには、Zで生まれた活動体と、地域の人や場所をつなぐことが必要です。そこで、オノカラーがZの外に出て地域をリサーチしたり、地域のお祭りやイベントの企画運営に参加したりする機会をつくりました。こうして彼らの存在が地域に知られるようになると、「こんな面白い人たちがいたのか」「ぜひ私たちの施設でも活動してほしい」という声が返ってくるようになりました。オノカラー自身にとっても、さまざまな人の目に触れることで反応をもらえたという体験は、新しい出会いや可能性の広がりとして受け止められていたようです。そこで価値あるものとして受け止められていたのは、オノカラーたち

による「活動体」そのものでした。地域とオノカラー双方のそうした反応を見たことで、私たちは、拠点ありきではない活動体がアートステーションのモデルのひとつになりうると感じました。

「オノカラーフェス2016」は、活動体としてのアートステーションを地域に根付かせるというZにおける試みの延長にあり、その集大成ともいえるイベントです。これを契機に、会場となった場を中心に、有志のオノカラーによる集まりができていたり、フェスではじまった活動が、その後も継続し発展していくなどの状況が派生しています。これはまさに、としまアートステーション構想が目指していた「自分たちの手でアートステーションをつくり出していく」状態だといえるでしょう。それはまだ小さな芽かもしれませんが、おのずとところがる人たちの手によって、これからも育まれていくことでしょう。

写真：①オリジナルの電飾をつくる「電子工作の会」 ②テーマを決めて本を持ち寄り、感想を語り合う「ひよっこりと、読書会Z」 ③ぶつぶつ交換をする「わらしべ長者プロジェクト」 ④助成金についての勉強会「助成金との健康的な付き合い方を考えるゼミ」 ⑤シルクスクリーンでそれぞれ好きなものをつくる「カシオペア印刷」 ⑥着ないけれど捨てられない服をリメイクする「OPEN CLOSET」



活動を持ち込むことで人々を巻き込む

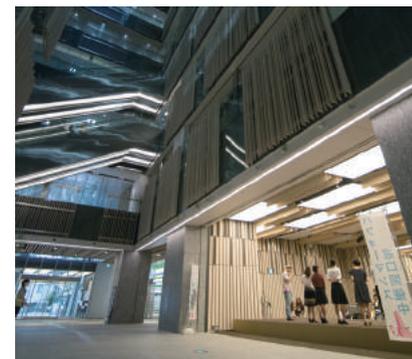
区役所×居間 theater 「アートステーション構想推進課 パフォーマンス窓口」

多様な人々が訪れる豊島区役所で、としまアートステーション構想に触れる機会をつくることにより、今後、新たな活動や拠点が生まれる土台をつくることを目指すプロジェクト。アートに特化していない区役所という公共空間で、その形式を踏襲したイベントを実施することで、偶然通りがかった人々が、日常生活のなかで思いがけずに、あるいはそれと知らずにアートに出くわし、巻き込まれていきました。

区役所という現実の場に、架空の「窓口」という区役所ならではの仕組みを置くことで、アートステーションと呼びうる状況を並走させる手法は、日常生活の場に新たな活動を持ち込む際の、自然さと違和感の絶妙なバランスに気づかせてくれます。

場

豊島区役所



2015年5月に移転した新庁舎は、日本初の超高層マンション一体型の本庁舎です。低層階に豊島区役所、高層階に民間の分譲マンションが同居しています。1階に設けられた多目的・催事スペース「としまセンタースクエア」は、ステージが吹き抜けに面しており、ステージ奥の可動壁を取り払うと、一体の空間として使用することができます。低層階屋上には庭園が設けられ、緑に囲まれながら池袋のまち並みを見下ろすことができます。

アーティスト

居間 theater

p.11 参照

ステイトメント

居間 theater は、カフェやまちなかなど、さまざまな場所で活動しています。そこでは、ふらっと訪れるお客さんや居合わせた人、普段はアートにあまり馴染みがない人にも出会います。偶然出会った人と、同じ場所において、何気ない時間と風景が生まれる。そんな実験を日々行っています。

そして、出会う人たちのなかには、それぞれの想いもあります。なにかを表現してみたり、触れてみたいという欲求、こだわり。熱量や度合いもさまざま。そんな人たちと同じ時間を共

有し、一緒になにかをやったりするのは、想像以上に難しく、そして面白いところでもあると思うのです。

今回は、としまアートステーション構想の考えかたと、区役所の窓口という形式を借りて、アートステーション構想推進課を設立します。

この「パフォーマンス窓口」は、あなたがどこかへ開いたり、なにかへつながるための窓です。

あるけどない、架空の窓口にぜひお越しください。

居間 theater

活動

アートステーション構想推進課

パフォーマンス窓口

さまざまな場や状況とのコラボレーションを得意とする居間 theater が、区役所の「窓口」という形式に着目。豊島区役所1階のとしまセンタースクエア内に、架空の「アートステーション構想推進課 パフォーマンス窓口」を出現させました。「パフォーマンス窓口」を通過した来場者は、「エキシビション」「デモンストレーション」「クエスチョン」「ドキュメンテーション」「シミュレーション」という、5つのパートに分けられた場へ向かい、アートステーションという概念や事例に触れました。

■パフォーマンス窓口



アートステーション構想推進課職員に扮する俳優やオノカラーにより、「アート」「ステーション」「構想」について説明するパフォーマンスが上演されました。来場者は窓口を訪れた区民役として、このパフォーマンスに巻き込まれました。

■エキシビション



日本全国のアートステーションと読み解けるような取り組みと、そうした取り組みが各地で生まれている近年の動向を紹介する展示。その内容は、国際芸術祭、商店街の空き店舗を活用した場づくりから、個人の家をセミパブリックな用途で活用する「住み開き」までさまざま。来場者は、音声ガイドを聞きながら見てまわりました。

■デモンストレーション



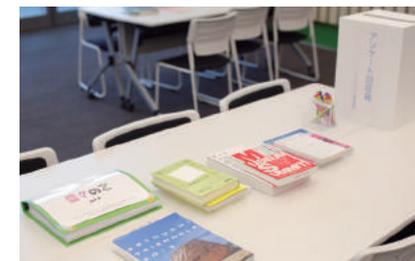
豊島区内で活動している人たちを中心に、それぞれのアートを披露するステージ。プロアマ問わず、学生から高齢者までさまざまな表現者によるパフォーマンスやプレゼンテーションが行われました。

■クエスチョン



実際に何かアート活動をはじめたいと思っている人と、としまアートステーション構想事務局スタッフとの対話の場。活動の場を求めている人、仲間や相談相手を探している人などから、相談が持ち込まれました。

■ドキュメンテーション



日本全国のアートステーションとも呼べるような活動のドキュメントや、関連書籍が置かれたラウンジスペース。

■シミュレーション



としまアートステーションYをめぐるプロジェクト（2014年度実施）をもとに作成したオリジナルカードゲーム「としまアートステーションYのつくりかた」をプレイすることで、自分なりのアートステーションをつくるプロセスをシミュレーションできる場。

エピソード

としまアートステーション構想について、「知人を誘おうにも何と言えよかわからない」という声がオノコラーから挙がっていました。そこで、としまアートステーション構想について語る言葉を獲得できるよう、パフォーマンス窓口では、彼らがアートステーション構想推進課の職員を演じ、この構想について来場者に説明することとしました。

窓口スタッフ希望者は、ワークショップ形式で居間 theater の演技指導を受けました。居間 theater が作成した台本を覚え、参加者同士で説明を行いました。小道具も使いながら、「アート」「ステーション」「構想」という3つの単語に分けて説明したり、お客さんとの質問と返答のやりとりはアドリブも交えて進めていきました。

このワークショップで得た説明や対話のスキルは、パフォーマンス窓口だけでなく、としまアートステーションZのオープン日にも発揮され、オノコラーがZ来場者に自分の言葉でアートステーション構想を説明している姿が見られました。

また、このイベントを区役所で実施するにあたり、としまアートステーション構想の担当課以外にも協力や許可を受ける必要がありました。施設管理担当者や広報担当者と現場で顔を合わせることで信頼関係が生まれるなど、区役所職員の積極的な関わりが実現には欠かせませんでした。庁舎内のイベントについて質問されることの多い区役所の案内スタッフや警備員たちは、理解を深めるために、自身の休憩時間に立ち寄りて体験してくれました。日常とは少し違う環境があることで、そこで働いている人たちに少しの変化が生まれました。それが、既存の場所にアートを持ち込むことによる面白い瞬間です。



実施データ

■アートステーション構想推進課パフォーマンス窓口

第1回

日時：2015年8月28日（金）8:30～17:15
8月29日（土）9:00～16:00

会場：豊島区役所1階センタースクエア
来場者数：延べ694名

窓口出演：池上綾乃、伊藤優里、大杉拓真、久世文、熊谷朋美*、杉森裕樹*、高橋友紀*、名取萌音、西島慧子、野村松代*

案内：児玉尚子*、野口真知子*、堀切梨奈子、葉袋桃子
デモンストレーション出演：小山衣美、笠原ギター・ウクレレ音楽院 プアメリアフラ&タヒチ、きゅっきゅ8企画∞マーブルポケット、金雀、桜月、Jasmine、スマイルサカス、タクト、nichiyoubi、福田毅、プリンセス4、まうっこ連、Magic Kingdom Project、目白ハーモニーメイツ、山崎朋、yumen

会場構成・エキシビジョン制作：日本大学佐藤慎也研究室（内野孝太、緒方彩乃、今村文悟、江澤暢一、大川碧望、鎌田七海、木村肇、下村耀子、末次華奈、仲村祥平、柳スルキ、江口美樹、岡田海友、荻冬音、小野瀬綾香、河西直子）

アートディレクション：進士遼

音響：金光佑実

PR映像、記録写真：富田了平

記録映像：ササキユイ子

記録映像撮影：片桐勇人

協力：区民ひろば高南第一、区民ひろば南池袋、雑司が谷地域文化創造館、花井墨店、葉本墨店、黒田有彩、牧野まりか

企画・制作：居間 theater

（東彩織、稲継美保、宮武亜季、山崎朋）、

としまアートステーション構想事務局

第2回

日時：2016年7月1日（金）12:00～19:30
7月2日（土）9:00～17:00

会場：豊島区役所1階センタースクエア
来場者数：延べ773名

窓口出演：小笠原綾子*、方瀬りっか*、木村英里*、塩田将也、下村耀子、高橋友紀*、西島慧子、野村松代*、道本有香

デモンストレーション出演：アマキオト、有澤京花、今和泉隆行、イマシアター楽団、E KOMO MAI、小山衣美、学習院大学手話サークル“のぞみ”、角銅真実、KIDS 日本舞踊、きゅっきゅ8企画∞マーブルポケット∞、京極朋彦、金雀、Jasmine、Jessica、スマイルサカス、大正大学書道研究部、ちどりあし、なぎさ、Ballet Project、福田毅、まうっこ連、山崎朋、山本山田*、立教大学演劇研究会

会場構成・エキシビジョン制作：日本大学佐藤慎也研究室（堀切梨奈子、今村文悟、大川碧望、下村耀子、仲村祥平、江口美樹、大庭奈菜恵、大場麻莉子、岡田海友、河西直子、澤明日菜、戸邊彩香、中川紗里奈、橋爪美希、山本美咲、吉田隼也、柳スルキ）

アートディレクション：進士遼

音響：椎葉爽

PR映像、記録映像・写真：富田了平

当日運営：梅沢友香、大木教由*、緒方彩乃、神田亜利紗、岸本正寿*、仲村祥平、牧野まりか、柳スルキ

協力：区民ひろば南池袋、雑司が谷地域文化創造館、金光佑実、黒石紗弥子、黒田有彩

企画・制作：居間 theater

（東彩織、稲継美保、宮武亜季、山崎朋）、

としまアートステーション構想事務局

*オノコラー



活動を持ち込むことで人々を巻き込む

アートステーション×居間 theater 「としまアートステーション W パフォーマンス待合室」

としまアートステーション構想の事業終了に伴い、「アートステーション」とはなんであったのか、どのように終わりを迎えるのかをアーティストの居間 theater とともに考え、提示したプロジェクト。としまアートステーション Z を「待合室」に見立て、何かを待つ場所をつくりあげました。

としまアートステーション構想の拠点であり、ゆくゆくは自分なりのアートステーションを見出していくであろう区民の準備や最初の一步を支援してきた場所である Z を、「待合室」と名付け、待つというふるまいを演出することによって、このプロジェクトは、アートステーションを生み出す際に「待つ」という姿勢が持つ意味や役割について思いを巡らせる機会をつくり出しています。

場

アートステーション



「アートステーション」とは、としまアートステーション構想が提唱する、アートを生み出す小さな拠点やささやかな営みのこと。これは、具体的な「場所」だけでなく、「活動」や「人々」も含む概念です。

Z は、としまアートステーション構想がはじめた 2011 年度から、アートステーションの一例として、本構想の拠点となってきた場です。今回は、「アートステーション」について考えるための「場」として、Z を選択しました。事業が終了するにあたって、「アートステーション」とはなんであったのかを考える場として、これ以上の場所はありませんでした。

アーティスト

居間 theater

p.11 参照

ステイトメント

「としまアートステーション構想」の事業終了にあたり、今回は居間 theater が考えるアートステーションをつくります。

さまざまなひとが、それぞれに待つ場所、「待合室」というものに注目して。

クリスマス、お正月、電車、バス。

春、夜明け、果報。

ひとはいつも、なにかを待ちます。

いろんな「待つ」を考えることは、いま私たち

がいる場所の速さや、進んでいるものごとの目的や、なにかに向かう道のりを、いまいちど考えることかもしれません。

アートステーションも「待つ」みる。

はたして、やってくるでしょうか。

まあ、気長に待つとしましようか。

居間 theater

活動

としまアートステーション W パフォーマンス待合室

としまアートステーション構想では、2年間にわたり居間 theater とともに「アートステーション」とは何かを問い続け、さまざまなアプローチを試みてきました。このプロジェクトでは、そのような共同作業を経て、居間 theater が考えるアートステーションのかたちを「としまアートステーション W」として提示しました。「W」は Z、Y、X の次であり、Waiting room= 待合室の「W」です。いつかやってくる何かを待ってみるという行為を通して「アートステーション」とはなんであったのかを考えることにしました。

■人形劇「クリスマスキャロル」



音楽家・角銅真実とイマシアター楽団（砂川佳代子と居間 theater）によるパフォーマンス。主人公のスクルージがクリスマス前夜に過去・現在・未来の聖霊との出会いによって自分自身を省みる物語を、音楽を交えた人形劇として構成し、待つ間に楽しめるパフォーマンスを行いました。

■落語「ゴドーを待ちながら」



劇作家サミュエル・ベケットの「ゴドーを待ちながら」をベースとした、俳優の福田毅による落語パフォーマンス。何を待つか、誰を待つか…。何かを待つことの意味や、その待ちかたのバリエーションに着目し、子どもからお年寄りまでが楽しめる落語のパフォーマンスを行いました。

■待つごはん



食をテーマに作品をつくる現代美術アーティスト EAT&ART TARO が、「待つ」をテーマにドリンクやフードを提供しました。メニューは、水出しコーヒーや水出し紅茶、スープや焼き菓子、肉料理など、待つと美味しくなるもの。スープができあがるまで、お菓子やお肉が焼きあがるまで、どれくらいかわからない時間をじっくり待って過ごしました。

■待合室の音

音楽家の金光佑実と居間 theater の稲継美保による、待合室に流れる音楽とアナウンス。時間帯に合わせた雰囲気異なる音楽や、待合室の利用方法についてのアナウンス、パフォーマンスや展示を知らせるアナウンスなど。普段、無意識に聞いている公共的なアナウンスを模することで、その場にいる人たちは、そこが「待合室」であることを意識するようになりました。

■特別展「アートステーションのあゆみ」



としまアートステーション構想の6年を振り返る展覧会。これまでの発行物のなかで、としまアートステーション構想や広く文化事業について語られた「言葉」と、としまアートステーション構想のプログラムのなかで使用・制作された「もの」、6年間で企画・実施されたプログラムのチラシを展示しました。事業の立ち上げ時から関わっているとしまアートステーション構想事務局の佐藤慎也によるギャラリーツアーも開催されました。

■フリーペーパー「待合室」

駅の待合室で配架されているフリーペーパーを模した読み物。「としまアートステーション W パフォーマンス待合室」のコンセプト、「待合室」で提供されるプログラムとアーティストの紹介、「待つ」ことに関連する文献や、空港の待合室のリサーチの報告などが掲載されており、何かを待つ間、手にとって読むことができるようにしました。

エピソード

このプロジェクトは、これまでアートステーションとは何かをともに探ってきた居間 theater から、としまアートステーション構想が2016年度で終了することへの応答でした。

作品のプランを練りはじめた当初は、架空のアートステーションを複数提示することで、これから生まれるかもしれないアートステーションの可能性を示すという案も出ていました。しかし、としまアートステーション構想のこれまでの活動や、全国各地で行われているアートプロジェクトを見てみると、小さな活動が芽吹く瞬間や、時間をかけてそれらを育てていくことがより重要であることがわかります。また、アートプロジェクトや作品は、効果が現れたり評価が定まったりするまでに長期的な視野を要することから、早急に結論を出すことへの懐疑的な視点を持ちはじめました。

そんななかで、例えば、アーティストや事務局などアートプロジェクトを仕掛ける側が何かを提示したり、アートステーションをつくることを市民が受動的に待つのではなく、能動的に待ってみたら何が見えてくるだろうかと考えるようになりました。プロジェクトの実務者と市民のこの関係は、行政と実務者の関係にも置き換えられるかもしれません。つまり、行政が用意した枠組みを待つ実務者の姿勢もまた問われているのです。

訪れた人たちが、としまアートステーション構想の終わりを能動的に待つ誰かのふるまいに触れること、また、自らも何かに対して能動的な待

ちの姿勢を取ることを期待して、駅直結のとしまアートステーション Z に「待合室」を模した空間をつくることにしました。

「待つ」「待合室」というキーワードに導かれてさまざまなリサーチをはじめました。居間 theater は、まず、鷲田清一著『「待つ」ということ』という本に出会い、「待つ」という行為に対する捉え方が大きく変わったそうです。また、空港の待合室にフィールドワークへ出かけてみると、そこは明確な目的を持って待つ場所であることにあらためて気づかされました。それとは対照的に、このプロジェクトが目指すのは、明確な何かを待つ場所ではなく、「待つ」という行為ができる場所をつくることです。そこで、何時間でも待つことのできる居心地のよい場所をつくることにしました。一方で、椅子の配置や空間のデザインは、フィールドワークから得た知見をもとに行いました。

公開制作期間には、待合室としての空間構成や雰囲気、訪れる人にどのように作用するのかがよくわかってきました。例えば、具体的な目的までの待ち時間を過ごしに来た人にとっての不自由さ、雑多な活動が同時多発的に起きている普通の Z を知っている人の違和感、パフォーマンスがあると聞いて訪れた人が肩透かしを食らっている様子などを感じ取ることができました。どのような場をつくりたいのか、それぞれの過ごしかたを排除せずにどのようなバランスで成立させたいのかを、あらためて考え、照準を合わせていきました。

実施データ

■公開制作

日時：2016年12月10日（土）、11日（日）12:00～18:00
12月12日（月）～16日（金）15:00～21:00
会場：としまアートステーションZ
来場者数：延べ185名

■パフォーマンス待合室

日時：2016年12月17日（土）、18日（日）
始発（5:09 元町・中華街行）～終電（0:34 池袋行）
会場：としまアートステーションZ
来場者数：延べ299名
待合パフォーマー：居間 theater、EAT&ART TARO、
角銅真実、金光佑実、佐藤慎也、砂川佳代子、福田毅
ドラマトウルク：長島確
会場構成：日本大学佐藤慎也研究室
（仲村祥平、今村文悟、中村直）
記録映像・写真：富田了平
当日運営：道本有香、山本博士
サポートオノカラー：小田嶋景子、篠田美幸

企画・制作：居間 theater
（東彩織、稲継美保、宮武亜季、山崎朋）、
としまアートステーション構想事務局



まとめ編

アートステーションをめぐる言葉

シンポジウム

「人とまちをつなぐアート/その実践と展望」

オノカラーの声

事務局の声



アートステーションを
めぐる言葉

としまアートステーション構想や豊島区の文化政策について、これまでに対外的に発行・発信されたテキストのなかから、「アートステーション」という考えかたを深めるうえで特に重要だと思われる言葉を抜粋しました。

としまアートステーション構想や豊島区の文化政策が、どのような社会状況を背景に、どのような理念に基づき、何をなそうとしてきたのかについて、そのときどきのさまざまな人がつむいできた言葉をたどることで、前例も正解もなく捉えどころのない「アートステーション」の輪郭が、おぼろげながらも浮かび上がってくれば幸いです。

なお、これらの言葉は、アートステーション×居間 theater「としまアートステーション W パフォーマンス待合室」の一環として、特別展「アートステーションのあゆみ」(p.44)にて展示されました。

この構想はハードをつくることを目的としたものではない。「Z」をスタートとして、豊島区民をはじめとする多様な人々が、区内各地域のさまざまな場所で、自主的・自発的に、まちなかにある地域資源を活用したアート活動を展開することがゴールであり、それこそを「としまアートステーション」と呼びたいと考えている。そのため、この事業には「構想」という名前が付いている。環境システムが構築されることにより、区内のあちこちに「としまアートステーション」が生まれ、それによりコミュニティ形成が促進され、人と人、人とまちがつながっていく。豊島区をそのようなまちにしてゆくに、アートをを用いた試みをはじめ。

シンポジウム「人とまちをつなぐアート／その新たな展開と可能性」配布資料
(2011.10.24)

雑司が谷にある千登世橋教育文化センター内の元カフェスペースを、としまアートステーション構想の拠点として活用しています。「Z」という名は、アルファベットがA-Zとあるように、これから豊島区内に様々なアートの拠点がが増えていくよう、願いをこめてつけられました。としまアートステーション「Z」では、そんな可能性を提示するプロジェクトを展開していきます。アーティストらがこの場所でプロジェクトを立ち上げ、様々な実験を始めました。イベントの無い日も、セルフカフェスタイルでお待ちしています。いつでもお気軽にお立ち寄りください。

「としまアートステーション構想ニュース」
2011年11月号

わたしたちのまち、豊島区は、多様な人々が夢を描き、営みを重ねながら、彩り豊かな文化と芸術はぐくんできました。

歴史と伝統を受け継ぎ、これを糧として、次の世代に伝える新たな文化を創造し、世界へ発信することは、わたしたちの望みであり、使命です。

わたしたちが享受し、創造する文化は、癒しと勇気を与え、生きる力をもたらし、まちに新たな魅力と輝きを生み出します。

わたしたちは、文化を通じて相互に理解し、共感し、尊重し合う心を育て、人と人とのつながりを何よりも大切にしながら、あらゆる人々と協働し、いきいきとした地域社会づくりを進めます。

未来に向けて、わたしたち一人ひとりが担い手となり、誇りと活力に満ちた文化の風薫るまち、豊島区を築いていくことを決意し、「文化創造都市」を宣言します。

文化都市宣言
(平成17年9月22日 告示第193号)

一財政再建への切り札が、なぜ「文化」だったんでしょう？

決してハコモノをつくる気はありませんでしたし、財政状況からも無理でした。しかし文化政策を進めることで、我々の意識が変わり、まちに元気が出ると思えました。「感動」は文化からでないと思われませんでした。不安があったことも事実です。どうしたら、文化が育つ土壌がつかれるか、「ふるさと豊島を想う会」で文化人が集まり意見を交わすうち、「文化政策懇話会」を開いて、豊島区の文化政策について提言していただき指針にしたいと思うようになりました。

そんな時、「文化は人を元気にする、そして元気な人が元気なまちをつくる」という福原義春さんのお言葉に感銘を受けました。

高野之夫区長インタビュー
「文化でひらく未来への扉～文化政策を振り返って」
(2012年11月12日収録)
『としまの文化デザイン』
(豊島区文化商工部文化デザイン課・編 2013.2)

現在日本はもちろん世界のどこをみても、「こんなはずではなかった」という状況が続いています。(…)

この状況を打開するのはたやすいことではありませんが、そこで鍵となるのが、文化芸術のもつ力と、都市のもつ軽快さです。文化芸術は、単に心を慰め、癒しを与えるもの、つまり「消費」するだけのものではありません。自分を表現し、他と対話し、連帯する能力と、固定観念から解放され、自由にひらめきを生む力を与えてくれます。問題に前向きに取り組み、解決を目指す力を一人ひとりに与えてくれる、極めて積極的な「投資」なのです。問題解決のためには新しい政策の導入や制度改革が必要ですが、同時にそれらを実施していくのはあくまで人間であること、その人間に十分な「やる気」と「モラル」が必要なることを忘れてはなりません。ここで文化芸術が大きな力をもつのです。

都市は、個人にこうした文化芸術の力を与え、活躍の場を与えてくれるのに相応しいサイズであると言えます。国は大きすぎて、市民の毎日の関心にきめ細かく応えることはできません。

文化庁長官(当時)近藤誠一
『日本の将来と文化創造都市』
『としまの文化デザイン』
(豊島区文化商工部文化デザイン課・編 2013.3)

主体的に文化活動に関わることができる環境を用意することで、区内の至る所に「としまアートステーション」が生まれ、「人と人」「人と街」の間に強く暖かい絆が生まれることを期待しています。そのゴールがどのようなものとなるのか、模索を続けながら進めている実験的な試みです。3・11以降の社会では、こうした公共活動のあり方があらためて問われていると感じます。用意された公共から主体性のある公共へ。としまアートステーション構想は、そんな「自分ごと」の公共文化事業なのです。(談)

佐藤慎也「『自分ごと』の公共文化事業」
『としまの文化デザイン』
(豊島区文化商工部文化デザイン課・編 2013.3)

アートを生み出す小さな拠点を、「アートステーション」と呼ぶことにしました。

アートはもともと「技」の意味。人の手によって何かを生み出す技がアートです。絵画や彫刻をつくるばかりでなく、日常のなかにほっとする、またはぎよっとする異空間を生み出すのもアートです。だから、アートとの関わり方は、きれいな「モノ」をつくったり、美術館で鑑賞することだけに限りません。もしかしたら、それはみなさんの生活のなかにまぎれこんでいて、普段やっていることやこれからやろうとしていることの、すぐ近くにあるかもしれません。

ふつう、ステーションといえば鉄道の駅。だけど、他にもいろんな機能をもつ「○○ステーション」があります。宇宙ステーションは宇宙の研究や実験をする最前線。ガスステーションは燃料を補給するところ。ラジオステーションは番組を発信する基地局。ナースステーションは看護師さんの詰所。アートステーションは、アートをめぐって研究や実験をしたり、補給や発信をしたり、人が集って話し合ったり、その他いろんな機能をもつ場所になるでしょう。

わたしたちオノコロのいる「アートステーションZ」は、そんな拠点の一例です。わたしたちは、ここでイベントの開催や情報発信をしながら、アートを生み出す小さな拠点が、それをほしと思った人の手で、街のあちこちにできたらいいなと思っています。

豊島区にアートステーションが増えてほしい。
わたしたちは、みなさんがさまざまな使い勝手の拠点を
つくるお手伝いをします。

一般社団法人オノコロ「事務局からのメッセージ」
(2014.6)

わたしたちは、Zを、ひとつのコミュニティ(仲良しグループ)にしないことを心がけてきました。「え? コミュニティをつくるんじゃないの?」と意外に思われるかもしれません。その理由は、Zが、いろんなコミュニティが共存し、その枠組みを越境して人と人が出会う場所であってほしいと思っているからです。

としまアートステーション構想のコンセプトブックには「用意される公共から主体性のある公共へ」というフレーズが載っています。

「公共」って何でしょうか。「コミュニティ」とは何が違うのでしょうか。「コミュニティ」が、気心の知れたメンバーズクラブだとすれば、「公共」は、まったく知らない誰かや違う価値観を持った人とも鉢合わせる場所です。だから、自分の価値観や立ち位置をかき乱されたり、不快感を感じたりすることもあれば、思いがけず世界が拓けるような出会いもあるでしょう。

Zは、そんな「公共」を、誰かに用意してもらうのではなく、ひとりひとりが主体的につくりはじめる拠点でありたいと思います。

4. Zはこんな場所であってほしい
『としまアートステーションZのつくりかた』
(2016.3)

森:仕掛ける側も、アートの考え方に対する品揃えをもっと豊かに持っていないと、ハードなアートばかりだと中崎さんみたいにいい意味で脱力した表現を評価できなくなる恐れがある。ハードなアートが含んでいる、交感神経が活性化して緊張を強いるようなものではなくて、副交感神経的なリラックスしたアートプログラムも同時に必要なのかもしれません。特に生活圏に入ってくるとなると、ただでさえストレスが多い社会で、普段から緊張を強いられているところに対してストレスを与えるのではない、アートが日常に溶け込んでいくようなものも含めて、もっとアートプログラムの可能性の幅を広げておく必要があると思います。そのことを仕掛ける側がどれだけ自覚的になっているかによって、質的なコントロールは変わっていくので、経験も求められてくる気がします。

3. 主催者の声:としまアートステーションのこれから
(2015年3月13日収録)
『としまアートステーションYのつくりかた』
(2016.6)

樋口:行政でできない部分を民間にお願いする考えは、区も持っています。しかし、今回は初回ということもあり、やはりみんなそれぞれがいいところばかりを追い求めすぎたのかなと思っています。Yのケースでは地元の方が関わる形はつくりましたが、地域でプロジェクトをやっていくための細かい根回しをショートカットできたというわけではなかった。その辺は、先ほどの御用聞きの話ではないですが、我々も必要なときにきちんと前に出て動かないといけない、という反省になると思います。

佐藤:NPOが独立して活動していったときに、では最終形がどうなるかという、やはりまちの人たちとNPOと一緒に活動する関係なのか、それともNPO自体も離れ、地元の人たちが自覚を持って活動していくことが本当のゴールなのか。おそらく後者が理想型だと思って、NPOがサポートすることすら必要なくなる日がくるのかもしれないね。

3. 主催者の声:としまアートステーションのこれから
(2015年3月13日収録)
『としまアートステーションYのつくりかた』
(2016.6)



シンポジウム

「人とまちをつなぐアート／その実践と展望」

モデレーター：

熊倉純子（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）

パネリスト：

太下義之（三菱UFJリサーチ & コンサルティング 芸術・文化政策センター長）

鈴木一郎太（株式会社大と小とレフ取締役）

藤浩志（美術家、秋田公立美術大学教授）

としまアートステーション構想が2016年度をもって終了するにあたり、2017年1月23日、これまでの活動を振り返り、としまアートステーション構想の成果と課題を明らかにし、市民主体の創造活動を支援する文化事業の展望について議論するシンポジウム「人とまちをつなぐアート／その実践と展望」を開催しました。

第1部では、としまアートステーション構想事務局より、2011～2016年度までの活動を報告しました。続く第2部では、こうしたアートプロジェクトについて研究している方や、他の地域で類似の実践している方によるパネルディスカッションを行いました。

熊倉：としまアートステーション構想、実験的で未来型の試みだったと思うのですが、諸般の事情により今年度で終了するそうです。そこで、この事業を少しだけ知っていて、こういうことに興味を持っていたり、よそで似たような活動をしていたりする我々外部の人間が、「としまアートステーション構想ってなんだっただろうね」ということを客観的な視点から語ってみようと思います。最初にパネリストのみなさんがどんなことをしているのか、ひとりずつ活動紹介をしていただこうと思います。まずは、藤浩志さん。アーティストであり、このシンポジウムのタイトルにある「人とまちをつなぐアート」と言ったときに、そのようなことをたくさんやっていらっしゃる人というふうにご存知の方も多いかと思います。



藤：こんにちは。活動紹介を5、6分と言われましたが、無理です（笑）。

としまアートステーション構想の話でいうと、事業がはじまる前段階くらいから関わってました。「アートセンター」というと、どうしても大きいものをつくらうとするけれど、本当にそうなのか。ステーションみたいに、いろんなものがいっぱい必要じゃないかという話が出ていました。東京アートポイント計画というのもそうですが、都内に大きいアートセンターをつくるんじゃなくて、いろんな地域でいろんな人たちが活動しているわけだから、その活動に興味関心を注ぐことが大事で、それは水をあげることに近いんじゃないか、ということを当時考えていたんですよ。いろんな活動

の種が実はもういっぱい東京にはある。豊島区にも数万という活動の種があって、そこに興味関心という水を注ぎ、光を当てることでいっぱい芽吹いていこうと。そのとき、土地に養分があればあるほどいい。特にこの雑司が谷は谷間ですから、養分がたまっていそうなので、いろんな芽が発芽するんじゃないか。ということで、この事業がはじまったときに僕が最初にやった活動は「ミラクルウォーター」という活動でした。水という興味関心をどうやっていろんな種に集めていくのかと。としまアートステーションZに、植物が育っていくイメージを当時僕が落書きのように描いたチラシが展示してあります。



藤浩志「Miracle Waterをつくる。」(2011)

当時は福岡を拠点に、いろんな地域で活動をつくっていたのですが、その後、十和田で活動して、今は秋田で活動しています。雑司が谷に関わっていた頃までは、20年間フリーで、いろんな地域をめぐりながら活動していました。今日話題になっているような仕組みをつくるのか、拠点をつくるのかというところが大きい問題で、両方行っていました。

僕のブログサイトに今までの活動が載っているので、興味がある人は後日ご覧ください。家族が住んでいる福岡・筑前深江での活動、鹿児島の実家でやっているイイテラス、要らなくなった素材を使って活動をつくっていく「かえっこ」のシステムとか、対話の場をつくる活動もあります。美術館で勤めはじめる前までの記事は充

実しています。

僕はアートという言葉なるべく使わないように活動してきました。日常をどう超えるのか、いかに超日常的なすごいものやすごい状況をつくっていくかということに興味関心があります。日常的なゆるやかな場もいいんだけど、最近はそうじゃないビビッという何かインパクトのある強い活動を圧倒的な空間を利用して行いたいと感じています。

熊倉：ありがとうございます。全国各地でこういう小さな拠点を生み出しては誰かに手渡してきた藤さん。あるいは最近はおうちちょっとビビッとくるものに興味がある藤さんから見て、このとしまアートステーション構想がどう見えたのかはまた後ほどお話をうかがおうと思います。続きまして、鈴木さんお願いします。鈴木さんはアーティストではなくて、ソフトをつくるほうの人と理解してよろしいのでしょうか。



鈴木：というようなことが多いですね。鈴木一郎太と言います。よろしく申し上げます。静岡県浜松市の出身で、今も住んでいます。20代はイギリスでアーティストをしていました。イギリスというと、ここにいる方々はコミュニティアートとかをイメージするかもしれませんが、一切そういうことはしておらず、絵を描いてギャラリーで売るということを主にしていました。帰国して、同じ浜松市にあるクリエイティブサ

ポートレッツ（以下、レッツ）という、障害とアートのことをやっているNPOで6年半ぐらいお世話になりました。今は建築家と一緒に大と小とレフという会社を起こして3年目になります。今年度から、縁があって大阪の釜ヶ崎のコロームの理事を引き受けることにもなりました。としまアートステーション構想の活動は何度か足を運んだことがあります。

レッツにいた頃に、いろんな人が集まってきて自分のやりたいことをやり切るというコンセプトで場をつくりました。「たけし文化センター」という場所です。知的障害のある人が自分のやりたいことにものごくめり込んだりすることがあるんですが、福祉の世界だと、悪いことだと思われちゃうんですね。スムーズに一般生活を送るうえではマイナスだと。でも、逆に文化芸術だったら、やりたいことをやり切るとすごいですよね。自分の趣味とかに1日中没頭できる人って、みなさんの周りでも数えるくらいだと思うんです。だから、それを象徴的に扱って、人から評価されるためにやることじゃなくて、自分のやりたいことを忠実にやり切るという場所を運営しました。いろんな企画を持ち込む人がいたり、音楽会を丸一日、朝から夜の10時くらいまでやり続けたり、紙をビリビリ破く日もありました。

今運営しているのは「セミナールーム黒板とキッチン」というスペースです。商店街にあります。本当にキッチンと黒板が用意してあるだけで、あとは来る人が自由に使う場所。こちらが提供するものはほとんどないという場所です。

他には、就学前の障害のある子たちの施設にアーティストを連れて行って、療育的課題とアーティストのやりたいことをすり合わせてプログラムをつくるのを7〜8年くらいコーディネートしていたり、屋外の展示イベントにアーティストを10組くらいコーディネートして設営したり、イルミネーションイベントにアーティストを紹介して展示をするとか、豆腐屋さんという業態に注目して

展示会をやったり、立体駐車場に囲炉裏を移築するのを駐車場の社長さんと一緒にやったり。わかりやすいのは、ゲストハウスの内装、事業計画とかコンセプトづくりのお手伝い、普通に店舗の改装みたいなこともやっています。

それから、静岡にSPACという劇場があるのですが、そこの依頼で、演劇に対しては素人だったんですが、まち歩き演劇をつくりました。というふうに並べても結局一言では言えないような活動をしています。

熊倉：アーティストじゃないですよね、って言ったらアーティストだった。謎が深まるばかりです。今日はアート関係者の姿も多く見えますが、モデレーターの私としては、メインのお客様はここを利用したことがある地域のオノカラーの方々や、「結構ここ好きだったのにな」という区内の方々だと思うので、アーティストの言うことはやっぱりよくわからないというふうな展開かと思います。

では、今度こそ絶対アーティストではない太下さん。見るからに格好もアーティストではないですが、何者ですか。



太下：太下と申します。私が何者で、なんで今日ここにこう座っているかと…。生まれはわりと近くなんです。新宿曙橋の東京女子医大で生まれました。時代は下って小学校は、このすぐ裏の豊島区立高南小学校です。都電がすぐ脇を

通っています。そして、中学校はすぐ近くにあった豊島区立高田中学校です。ところが実は豊島区は都心過疎で、中学校が統合になっちゃったんですね。今は千登世橋中学校という名前になっています。無事にそこを卒業いたしまして、さらに時代は下ってですね、文化政策の研究に携わるようになり、10年ほど前に、今日モデレーターを務めている熊倉さんと、東京都の委員を一緒にさせていただきました。

10年前、なんの委員会だったかというとは実はオリンピックに関係しています。オリンピックが2020年に開催されますよね。今回お集まりの方は、みなさんご理解いただいていると思いますが、オリンピックはスポーツの祭典だけではなくて文化の祭典でもあります。そして文化庁は、2020年に向けて全国で20万件のプログラムをやるかと公表しています。

その文化庁より前に、ホストシティーである東京都が、IOCに対してぜひオリンピックを招致したいという提案をしているんですね。その立候補ファイルに文化をどういうふう盛りに盛り込んでいくのかという議論を、2006年から2008年当時していたわけです。結果としては落選してしまいましたが、2016年のオリンピックの立候補のときからそういうことやっています。どんな提案かという、「東京都は文化の重要性をよく理解しています」ということです。そして2016年の招致がもし決定したら、通常ですとその前の4年間、文化プログラムをやっていくのですが、東京はもう今からはじめちゃいますよ、という非常に野心的な計画を提案しました。そのなかで、一見地味だけど実は大きな目玉として、この東京アートポイント計画がありました。だから、実はとしまアートステーション構想の根っこは、10年前に仕組みされたオリンピックへ向けた大きなプログラムのなかにあります。実はこういう位置付けになります。今、豊島区の委員をやはり熊倉さんと一緒にさ

せていただいています。地元の方はご存知かと思いますが、高野区長は非常に文化に熱心です。そして豊島区は国際アート・カルチャー都市構想というものを策定しました。

さて2年ほど前、全国の自治体の将来人口を推定していくなかで消滅可能性都市という話が出てきたのを覚えていらっしゃいますでしょうか。これは田舎の山村の話とされている方が多いかもしれませんが、実は23区のなかで唯一豊島区が、その消滅可能性都市にリストアップされたんですね。高野区長としては、豊島区を消滅させてはいけないということで、そのためには何をしたらいいのかと色々な手を打つわけです。女性に優しい都市とか。そのなかの大きな柱にやっぱり文化的な魅力がないといけないということで、この国際アート・カルチャー都市構想が出てきたということになります。ただし、国際アート・カルチャー都市構想をこれから2020年に向けてやっていくというなかで、としまアートステーション構想が終わってしまうということとは非常に残念ではありますが。



熊倉：ありがとうございます。というわけで、太下さんは、シンクタンクで、文化芸術と国から地域までの発展にどう関係があるのかということとを専門に調べていらっしゃって、自治体などにも多くの提言を行っているという方です。

最後に私ですが、足立区北千住で、東京アートポイント計画のひとつとして、音まち千住の縁とい

うプロジェクトをやっています。東京藝術大学で文化政策やアートマネジメントを教えつつ、全国でこういう活動が起きていることに着目して研究したり、また、現場で役に立てるようなスタッフを育成すべく、実際にアートプロジェクトもいくつか行っています。

太下さんは、今いろいろ区がやっている構想の中核を担う作業会長をやっていましたよね。豊島区が目指しているものと、としまアートステーション構想との比較といいますか、何かお考えや感想はありますか。

太下：今、豊島区でやろうとしている国際アート・カルチャー都市構想というのは、ひとつのビジョンなのですが、その実施プランとしては、池袋を包括してブランディングしていくというものを策定中です。そして、その中核にアートとかクリエイティブが入ってくるというわけです。

おそらく豊島区の今の方向性と、このとしまアートステーション構想というのはきっと何か違う方向を向いてしまっていて、だからこのプロジェクトが中断ということになったのだらうと思うんですね。豊島区では国際アート・カルチャー都市構想という華々しいプランがあり、特に池袋という世界第2位の乗降客数を誇るような駅に注目したブランディングをやろうとしていて、どちらかというと派手な方向、ある意味わかりやすい方向に進んでいる。だから一見地味なとしまアートステーション構想とは違いが出てきているのかもしれない。ただ、よくよく考えていくと、本当は変わらないというか、もっと接点がいっぱいあったのではないかと思います。なので、今回一旦これは終わりますが、数年後、もしかしたら名称が変わるかもしれないけれど、実は中身が同じようなプロジェクトが再開する可能性もあるのではないかと考えているのです。

そして、この池袋なり豊島区というまちの特性とも絡んでくるのですが、豊島区が今、ライバルと

考えているところがあって、それは山手線と副都心線の沿線のまちなんですね。すなわち新宿、渋谷がライバルなのです。かなり買い物流動なんかも起こっているみたいなのですが、私鉄の沿線住民での奪い合いが起こっているわけです。

そして、新宿、渋谷と比べた場合、池袋を中心とする豊島区のまちの特徴というものは、一見、大都市のような顔をしていながら、一本裏路地に入るとすぐ、先ほどの活動報告にもあった木賃アパートのように、普通の暮らしがあるというのが最大の特徴なのです。逆に、新宿でも渋谷でもいいですけど、駅を降りてから15分歩いても木賃アパートの地域は現れてこないですね。ただ池袋は、西口に降りると芸劇のすぐ裏のあたりから公園や低層マンション群があり、さらにそのすぐ裏側はもう一戸建て住宅となっています。この雑司が谷だってそうですね。もともと副都心線が通るまでは鉄道の便がそんなによいわけでもないエリアだったせいもありますが、木賃住宅などが未だに残っています。そういう暮らしと都市的な顔が本当に皮一枚でつながっているという非常に面白いまちが、この池袋であり豊島区であると思います。

そう考えると、この池袋で区長の考えているような、アートで何かをやっていくとするとときに、



としまアートステーションY (2014)の舞台となった上池袋の木賃アパート

暮らしの場とか、普通の区民の暮らしっていうことを抜きには、全然プロジェクトは組み立てられないのではないかと思います。ここで何かプロジェクトを仕掛けるということは、渋谷で何かイベントをやるといえるのは全く違う風土と土地なのではないかという気はしているのです。なので、豊島区の政策とアートステーションの活動は、本当は根っこは一緒なのに、表面的な違いが結果として中断という現象に現れてしまっているのかなという見立てをしています。

熊倉：ありがとうございます。鈴木さんはどうですか。先ほどの活動報告を聞かれて、どんな印象を受けられましたか。としまアートステーション構想がもたらした成果とか、ここはどんなのかなということがあったらご意見を聞かせてください。

鈴木：プレゼンで面白いと思ったのは、文化事業1.0、2.0、3.0という表。1.0が鑑賞型、2.0が参加型、3.0が主導だったかな。

僕がやってきたことは、障害の関係だったりまちに絡んだりとかいろいろですが、僕がやりたいことをやりに行くというよりは、人のやりたいことに寄り添うことが非常に多かったんですね。まちの誰々さんがこんなことをやりたいと思っているんだとか、あの施設にいる誰々くんはこういうことに興味があってだとか。それで何かするとき、人に伝わるかたちにするとか、足りないものを補うという役割を担ってきました。それはお金だったり、計画だったり、大工仕事だったり、チラシづくりだったり、タイプによって違うんですけども。人に寄り添って何かやるのが非常に多いです。

その点で先ほどの表を見ていくと、1.0の鑑賞型と2.0の参加型は、主な受け手は芸術文化のファンだろうと思ったんですね。趣味でオペラを聴きに行くのが好きなんですとか。有名なアー

公共文化事業3.0

	市民	アーティスト	提供する形態	対応する公共文化施設とプログラム
文化事業 1.0	作品を鑑賞する	作品を発表する	ハード(施設)	美術館、劇場、コンサートホール
文化事業 2.0	作品の創造活動に参加する	作品を創造する	ハード + プログラム	アートセンター、練習室、ワークショップ
文化事業 3.0	自発的に活動や場を創造する	活動のヒントを見出す手助けをする	プログラム(システム)	としまアートステーション構想

初年度のシンポジウム「人とまちをつなぐアート／その新たな展開と可能性」(2011)および本シンポジウムで示された、としまアートステーション構想のコンセプトをあらわす表

ティストの人が来て作品をつくるから制作に関わってみたい、アーティストに会ってみたいというのが多い気がした。ただ、3.0にあたるとしまアートステーション構想でやっていたことは、芸術文化のファンじゃない人にアプローチすることだったんじゃないかと思っています。主催者側からすると、文化芸術に主体的に関わった人がこれだけ増えましたとか、そういう裾野が広がったということを成果として言うのかもしれないけれども。一方で、僕は、ここで活動したオノカラーたちにとっては、文化芸術をやったぞという感覚だけじゃないような気がしています。長年かたちにしたいと思っていたこと、人に伝えたいと思っていたこと、はじめたいなと思っていたこと、そういう想いが実現できたという経験だったような気がしています。そのふたつがオーバーラップしているので、話し手によって、「文化芸術に関わった人がこんなにいました」という言いかたになるかもしれないし、「長年の夢を叶えてくれた」という言いかたになるかもしれない。その中心にいるのがここに住んでいる人で、小さな規模の区民主導型

のものは、一見文化芸術じゃない活動に見えるので、わかりづらくはなっちゃうんだけど。例えば、福祉のなかでずっと考えてきても生まれなかったようなことが、文化的なアプローチで知恵を持ってくる人だったりノウハウを持てるような人と関わることで、顕在化できた、実現できたというようなことがある。そういう意味で、僕は面白いな、いいことだったんじゃないかなと思うんですけど。同時に、伝えにくい話だなとも思います。

熊倉：藤さんいかがですか。

藤：次にどうつながるかというのが一番重要だと思っています。今、3331 Arts Chiyodaでもプロジェクトをつくるためのスクールをはじめているんですが、いろんなところでプロジェクトをつくることを中心に動くようになってきました。4年前に東北で唯一できた公立美術大学で、僕は「作品をつくるんじゃなくてプロジェクトをつくる大学だ」と言っちゃったんです。作品はつくらなくてもいいのかということではなくて、プロ

ジェクトをつくる延長でいろんなものができていく。それは作品であろうがなかろうが関係ないんじゃないかなと思っている。作品をつくらうとしてつくるよりも、プロジェクトをつくる延長で作品になってしまう感じがいいと思っているんです。よくわかりませんよね。

いろんなプロジェクトがあると思うんですけども、その意味というのは、今現在はわからなくていいと思っています。例えば、みなさんが今ここにいることは、次にみなさんが何をやったかによって、はじめて意味付けられる。過去に起こったことや自分がやってきたことは、そのとききでは意味はなくても、それが、その後何につながったのか、将来的にそれがどうなったかによって、意味付けられると思っています。

だから、としまアートステーション構想にしても、みなさんが関わったこと、やったことは今はまだわからなくていい。それがその後どういふふうに変化して何に連鎖していったか。豊島区としてはとしまアートステーション構想が次にどういふかたちにつながったのかということが重要です。

だいたいものごとの価値って一世代30年くらいで変わります。例えば、漫画とかアニメもこの10年20年で文化として位置付けられて、今すぐ認められています。今となっては、漫画を文化じゃないよという人はいない。ただ、それが出てきた当時は、なんかわからない有象無象だったから、漫画家はみんな安アパートにいた。つまり、僕らが大切にすべき、注目すべきは有象無象なんです。僕自身が一番面白いと思うのは、まだ何も価値付けられてない有象無象が今現在もふつふつと集まっていて、いろんなところで活動がつくられているということ。それを、大きい力、過去に価値付けられた文化芸術という力とか、オリンピック？みたいなもので圧力をかけて潰してはいけないということです。僕らの世代にとっては、それは絵画、彫刻、伝統工芸だったかもしれないけれど、強い力が若い感性の活動を拘束しようとして

きたわけです。「あれするな、これするな！」って僕は縛られてきた。まだ10代20代だった頃は、それにいっぱい反発しながら、なんじゃかんじゃよくわからないことをずっとやってきて、なんかよくわからない人だよなと言われ続けて30年……みたいな(笑)。

でも、やってきたことが急に流通してしまったので、美術館に勤めたり大学教授になったりして、これではダメだなあと思っているのですが、問題は、将来の流通をつくり出すものは今現在では何の価値も意味も認められていないような有象無象だということ。ファンクラブが200万人もいるアイドルグループのさびやかな文化に隠れながら、すでに流通して多くの人を動かすアニメや漫画やゲームの近くに必ずいる。数千人はいます。今、豊島区に、うじゃうじゃした人たちが。次の流通を生み出す、まだ発芽前の種が。その人たちにどう触れていくのか、もしくはどう興味関心を持つていくのか。プロジェクトをつくるときにいちばん大事だと思うのは、誰とつくるかということ。そのなかからしか生まれてこないと思っています。

住んでいる人、関わっている人、これだけ多くの人がここにきているということは、心動いているからここにいて、誰か一緒につくりたい人がいるからここにいて。それは必ずなんらかのかたちに、次のかたちになる。これから数年間は無視されるかもしれないけれど、でも、その間に反動でいろんな活動が出て行く。ここから出て行くものはかなり期待されるものだと思うんです。はたして、どこまで信頼関係をつくりえたのか、つながりができたのかというのが一番興味があるところですね。

熊倉：藤さん、その小さな場があると、何かいいことがあるんですかね。

藤：僕らがやっていることは、普段は興味を持たれないわけですよ、誰からも。常識的には変な人

なわけです。僕の話をしてしまうと、例えば、ゴミのコレクションとかね、誰も興味持たないわけですよ。ところが、こういう場へ来ると「あ、面白いね」と言ってくれる人がいる。それは、自分がやっている些細なことにとってすごい力にもなるし、そこから自分が変わっていく可能性になる。「やっていいんだ」と思わせてくれる環境が必要なのだと思います。だから、こういう場、許されている環境があるという感じが、すごく重要です。

熊倉：今の社会の合理的な目的から外れたようなことだとか、本人がささやかと思っているか、とてつもないと思っているかわからないけど、アーティストだろうと普通の人だろうと、そんな変なこと言ったら普通はもうお友達になってもらえないようなことを言えたりする場所ですね。

藤：そうです。仕事場でも学校でもずっと隠すわけですよ。何かあるたびに社長にチラッと見てみたり友達に言ってみたりするけど、だいたい無視される。で、先輩から怒られる。抑圧を受けながら、くそーと思いつつ、ふつつつと密かに続けながら、それをちょっと違う人たちにチラッと見せると、興味を持ってくれる人がいる。というので僕はずっと生き延びてきています。そういうことってあるんだろうと思うし、そこからしか次の面白いものは出せないと思う。例えば、流行とか商品とか、常に新しいものをほしがる人たちがいて、次のものを求めている人たちって結構大勢いるわけです。そこにはデザインとかが関わってくると思うんですけど、そのデザインの種の部分というのが、ふつつつとした有象無象ですから。そこと出会える環境はすごく大切なんじゃないかな。いろんなことをいろんな人たちといろんな場所でやってきたとしまアートステーションXの活動とか、すごく可能性があるし、面白いことが起こっているはずですよ。まだ発芽する前なので見えなと思うのですが。

熊倉：鈴木さんはどうですか。この小さな場があったり、コミュニティがあったのかわからないけど、でも、50とか60とか活動が立ち上がっているわけで。どれくらい続いたのかとかはあると思いますが、一瞬でも集まって話し合いの場を持てたりすることの意味。今後の社会に、あるいは表現として意味があるんですかね。

鈴木：うまく言えないかもしれないですけど、すごく意味がある気がしています。今はNPOという組織がわりと一般的に認知されるようになってきていると思うんですけども。社会とか地域に関わることとかが仕事になっていたりして。自分の話ですけど、NPOの名刺を以前持ってたので、それを渡すと「で、本業は？」と言われていたんですね。6〜7年前くらいですかね。というのが、地方にいるとより強い。そういう状況から今はだいぶ変わってきているなとは思っている。

一方で、としまアートステーション構想で起きていた活動は、完全にそれで生計を立てようと思っていない人たちの活動だったりしますよね。仕事も自分の居場所もあるけど、満たされてない感もある。なんとなく周りのことを無視して生活しちゃってるんじゃないか。朝早くに家を出て、会社に行って、夜遅くに帰ってきて。家があるだけ、自治会費払っているだけというような生活が結構あるなと思います。でも、そのなかで、なんかやりたいって言うのは始める人たちがいるわけです。要するに、その人たちというのは、自分の手の届く範囲で生活をちょっと豊かにしたいけど、生業にする気はない。でも、そういった活動をしていると、それがいろんな人の受け皿になっていたりする。NPOになるとやっぱり団体なので、ひとつの大きな目的に向かうことになって、意識を共有する人たちだけが集まりやすいと思うんですが、自分の手の届く範囲をどうにかしたいという人たちが集まると、ちょっと違った人がいたりしても、結構許してくれるんですね。最近そう

いう多様性みたいなことを耳にしますけど、そういったものの受け皿に、実はこういう活動はなっていくんじゃないかと思います。

でも、それって、自分が子供の頃の状況とか、「三丁目の夕日」とか見たり、人から話を聞いていると、「昔はあったよね」で終わってしまって、そこで何がやられているかわかりづらくなっちゃう。そんなの新しいし、やる必要ないんじゃないかというふうに見えてしまって、動いてる人たちが「あれ？自分たち何してたんだっけ？」と自問する状況に追い込まれて、火が消えていってしまうということもあります。でも、僕は、地域や社会に対して、自分の身の周りに対して、何かをしたいという気持ちが、今、改めて起こってきているような気がしています。さっき藤さんが「有象無象」という言葉で、何かをしたい気持ちの表れだとかを表現したように僕はとらえたんですけど、タグ付けもされていないし、カテゴリー分けもされていない、名付けられなくてもいい、そういうものをちゃんと受け取る用意ができるのは、こういう文化のところだけなんじゃないか。小さなものだけれども、それが新しく何かを開いていく種になる可能性があると思うので、僕はそういうものが好きだっていう話なんですけどね。個人のやりたいことがすごく目に見えていくから。それは、社会の未来に対して何かを開いていく種をつくっている作業に見えてしかたないんです。

熊倉：今、鈴木さんがおっしゃられた家から仕事に行って帰ってくるだけじゃない暮らし、いわゆるサードプレイスと呼ばれる概念は、最近いろいろところでよく言われています。ファーストプレイスが家庭、セカンドプレイスが職場で、その2つだけだと人生貧しくなるので、第3の場所がほしい。そうした場所がないと社会が硬直化していく。また、そのもう少し前にはソーシャルキャピタ

ルという言いかたで、こういう場づくりに関して数多くの研究がなされています。アメリカの政治学者のチームの研究で、こうした活動がない社会は民主化が遅れるという知見があります。そこでいうサードプレイスとか社交場というのは、カフェでもいいし、囲碁クラブでもいいし、同好の志が集まるようなところでもいいんです。オリンピック後、何を残すのかというと、まさにこのアートステーションみたいなものが日本中にあって、特に有名なアーティストじゃないかもしれないけれど、若いアーティストたちと、何か変なことがしてみたい市民の方々が一緒に、役に立たないけれども、でも、ちゃんとワクワクするようなことをやっていくという状況です。役に立たないのが大事なんですよ、アートだからね。何かを助けるとか何かのためにじゃない活動を、みんなが普通にやっているということが大事なんです。

東京は大変成熟した文化都市で、消費するためのエンターテインメントから、世界に名だたる高級文化までもうじゅうぶんあるので、そんなことよりもそれを市民がどう楽しんでいるのかというようなことを、オリンピックの年に世界中に見せつけちゃう。

日本人って真面目で勤勉で仕事しかしてない国民というイメージがあって、大体お花見の季節に外国人みんなビックリしちゃうんですね。日本人でもクレイジーになるんだって。いやいやその素質はね、江戸庶民から我が国民のなかにはあるんです。と。芸術文化というかたちで、明治政府がどんどん一般の市民生活から切り離していったものを、どうしたらもう一回、市井の暮らしのなかに戻せるか。誰もなかに眠っているちょっとした文化的妄想、それを私はクリエイティビティと呼んでいるんですが、特別なアーティストみたいなタレントはないかもしれないけれども、クリエイティビティは万人に関係のあることなので、そこに、もう一度文化芸術というものを還元する試

みをしないとイケない。世界に先んじて、アジアで最も金だけは稼いできた。そしてとっとと経済活動をやめて、40、50歳になったらご隠居さんといって、連歌とかかっこいいけど、ダジャレ遊びに興じていた江戸の暮らしに戻らないと。どうせもう経済成長はないんだから、というようなことをイメージしはじめています。

池袋の再開発はお金があるならやればいけれど、ただどこまでいっても池袋が渋谷になるわけじゃないと私は思います。なぜなら渋谷や新宿は行政がつくったまちじゃないからです。勝手にそこに怪しいものが集まって怪しいことをして、それが許されていたまちだから栄えているわけで。2020年に東京に来た人が、「予想してたのと違ったわ、日本人」というふうになるかもしれない。住宅街に入っていったら、さっきのとしまアートステーションYみたいなところがあって、まちの若い人がいて、「誰がアーティストがわからなかった。じいちゃんが一番アーティストックだったような気がする」という光景に、人々が迷い込んでいくまちにしたいと思っていたので、このとしまアートステーション構想には期待をしていたのですが。

ただ、さっきのプレゼンを聞いていて、公園での展覧会と言ってもね、区役所の人としては「展覧会でした」って、区役所内部で説明するのは、かなり勇気がいりますよね。コンサートもね。全部、従来の展覧会、音楽会の概念をひっくり返そうとしているのはわかるけれど。そういうのじゃないのもありうるんだという解放の革命なんだって、私は共感するけど、区の関係者は困惑しただろうし、がっつり関わってくれた人はいいけれども、遠巻きに見ていた人には混乱を生じたかもしれないなと思いました。

文化庁のほうで、2020年に向けて国はどうしたかということ、太下さんと苦労して、とにかくNPOを仕事にすると言って。もちろん市民の方々がボランティアに楽しんでいただけるような



中崎透「上池ホームズ計画」で実施した「公園アンデパンダンin豊島」(2014)



中崎透「上池ホームズ計画」で実施した「上池ミュージックアワー」(2014)

場をつくり、そこでアーティストも協働できる場をつくるというのが大きな目的ですが、その場をつくる人はプロフェッショナルでなければ、なかなか続かないだろうと個人的には思います。やっぱり文化政策にとってまだまだ本当のNPOは難しいですか、太下さん。

太下：現状は難しいでしょうけれど、熊倉さんが座長の文化庁の文化審議会文化政策部会ということで、国の文化政策の根本になる第四次基本方針というものを策定したわけですが、その冒頭に日本が目指すべき文化芸術の姿が5つくらい書かれています。そのひとつに、「文化芸術に従事する者が安心して、希望を持ちながら働いている」という未来像が描かれているのです。ここでいう文

化芸術に従事する者というのは、もちろんアーティストやクリエイターだけではなくて、今ここで話に出たような、コーディネーターとかアートマネージャーとかももちろん含んでいるわけです。

そういった意味でいうと、アートNPOがきちんと持続可能で、それが職業として成り立つようになるということ、この国の方針であるはずなのです。現実がそれに向かって進んでいるかは別にして、オリンピックに向かって文化関連の予算は増えていくと思うのです。そのうちの結構な割合は、先ほど熊倉さんがおっしゃったように、派手なイベントに消費されてしまうかもしれない。ただ、全部じゃないはず。我々が頑張れば、もうちょっとそれを意味ある使いかたに広げていくこともできる。そして、それを未来に投資していくことで、2020年が終わった後に一体何が残るのか。

すなわち「レガシー」というキーワードということが大事になってくるのです。レガシーというのは過去から現在、そして現在から未来へ引き継いでいくものというイメージだと思いますけど、結局このオリンピックのなかでいろんなことをやったけれど、それは未来にとってどういう意味があるのかという確実なレガシーを求めていくべきです。日本は今後、経済成長はたぶんないでしょうし、人口は減っていて国力も下がってきますので、何かに投資するというのは、日本という国にとってこれが最後のチャンスだと思います。これでもしょうまいかなければ、未来永劫、日本は変革はできないでしょう。そのくらいの気合いでやっていくべきなのではないかと思います。

さて、とはいえ今日のフォーカスになっているとしまアートステーション構想というものについて考えると、やっぱり、さっき鈴木さんもなかなか伝わりにくい性質のものなんじゃないかとおっしゃっていて、確かにそういう側面があります。さきほど、ゴールのイメージとありましたよね。そこでさりげなく「区民全体へ」っておっしゃ



本シンポジウムで示したとしまアートステーション構想の目的をあらわす図

ただ、それはたぶん言葉の綾ですよ。「ゴール」という言葉にしたときに、それは区民全体ではないんだろうなと思うわけです。だって、区民全員がオノコロになって、オノコロ大団みたいになったら明らかに豊島区は不気味な区ですよ。だから、区民全体ではないだろうと。そうしたときに、じゃあ、人数なのか個人における深度なのかかわからないけれど、どのへんまで浸透すれば、としまアートステーション構想というものが機能しているのだという評価になるのか。その点が、たぶん、行政から見るとすごく評価しにくいというか、わかりにくいと思うのです。

行政の仕事って大抵わかりやすい。というわかりやすくないと困るじゃないですか。多少長期的なプロジェクトにしても、それこそまちづくりですと、「3年後にこの建物が建ちます」というゴールになるわけです。もしも「建ちます」と言って、結果として「建ちませんでした」または「違うかたちになっちゃいました」というのはアートでは許されるかもしれないけれど、というかアートはそういうものかもしれないけれど、行政の仕事としてはダメですよ。

そう考えると、このとしまアートステーション構想というプロジェクトの性質が、実は行政的な評価とすごく馴染みの悪い性質のものだったんだというのが改めて感じています。これは結構本質的な問題で、全国でこういうタイプのプロジェクトが増えて

いるじゃないですか。こんなコミュニティ型のプロジェクトがある国って、世界中で他にはないと思うんですけど、もしかしたらこういうクロージングというか、お葬式的なシンポジウムが全国でこれから増えていくんじゃないかとも思います。

藤：オノカラーが全体に広がったら気持ち悪いつて、本当にそうだと思う。

さっき僕がチラッと書いたみたいに、常に時差があるというのを把握しなきゃいけない。今の文化と言っているのは、過去においてはなんでもなかったものである。だから今なんでもないものが30年後にはすごく重要になってくるんだというのが重要で、それが育つ環境が必要で、そのプロセスをつくりましょうという話だと思います。なぜ池袋に漫画家が集まったかという家賃が安かったからでしかない。だからここがすごい高くなったら、そんな人は誰も住めなくなる。アーティストが集まるのはだいたい安いところ。そこに面白い人たちが集まってきて、いろんなエネルギーが集まって何かが発生するわけです。

僕はずっと、自分自身の将来がわからないように生きていて、自分が想像できない生きかたをしたいし、自分が想像できるものをつくりたくない。自分にとって新しいものをつくっていかうとすると、自分が今ここでつくりたいものが見えてチャダメだと思うんです。それを常に裏切って超えながら新しいものに向かおうとする。その状況をどうつくるかってことに向き合っています。たぶん文化行政としてはその仕組みについて論じなきゃいけないと思うんですよ。

すでに価値化されているもの、大量の流通が見込めるものだけを取り入れて、それで全部塗り替えてしまって、育ちかけている良質な酵母菌を、全部除菌するようなことはしちゃいけない。そういうところで地域は減んでいくわけです。20年30年したらもう新しいものはそこには育ってないわけですから。30年後に「昔は栄えていたのに今

は何もないよね」と言われかねない。30年後にもちゃんとすごい価値になるものが、ここから発生する状況をつくることは行政の責任だと思いません。その手法がアートステーションとか、オノカラーだったのだと思いますし、それは新しい菌としてすでに発生しはじめているのだと思います。でも、それがここで終わるということは、たぶん他の地域に伝播するんですよ。ここでできたものを見て、別の区が何かやりはじめるとか。隣の国ではじまるとか、秋田県のある村ではじまるとかね。そういうものだと思うんですよね。こういうものは飛び火して全然違うところから新しいものが発生する。

熊倉：ありがとうございます。飛び火しなくても、日本全国、特に困っている過疎的なところでは、こういうような活動はすでに行われていると思います。あまりにも流行りで批判もされたりもしていますが、先ほどのプレゼンテーションを聞いて、これは豊島区内に飛び火しなければ意味がないと思っています。よそではここに触発されなくても同時多発的に行われていると思うんです。まちの方々もいらっしゃると思うのでご意見を聞きたいと思います。

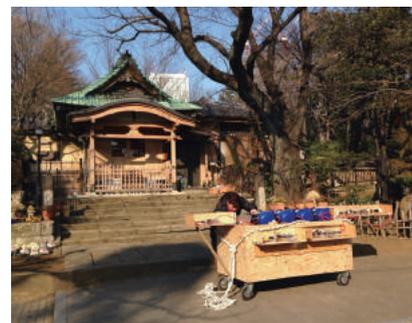
質問者1：私は去年まで6年間、東京音楽大学に在籍してたんなんですけれども、としまアートステーション構想の企画を一度も耳にすることがなかったんです。今日プレゼンテーションを聞かせていただいて、もし知っていたらオノカラーになりたかったなと思うわけです。お葬式とおっしゃりましたが、なくなる今知ってしまったのはちょっと残念です。

私が問題に感じたことはですね、地域に芸術を学ぶ大学がありながら、そこに全く認知されていない状況ですね。オノカラーって区民しか知らないものですかね。そうではないですよね。東京オリンピックを前提にしているということで、

豊島区民だけでなくいてるんなどを最終的に巻き込んでいかなきゃならないと思うのですが、そのときに音楽大学とかいろんなどころから来ている大学をうまく活用するというのは手だと思うんですけども。大学生も、たぶんそういうことを望んでいると思うんで、ぜひ活用していただきたいなど。

事務局：一応ちょっと言い訳を。活動報告に出てきた安野太郎さんの「ゾンビ音楽」という企画。東京音大の先輩ですが、彼がやっている時に大学にアプローチはしているので、全く何もしていないというわけじゃなくて、たまたまうまく伝わらなかったのかなと思います。もちろん近所にある大学と関係を持ってやるということは当然やってきております。

質問者2：大学2年生なんですけども、今年度からオノカラーとして活動しております。私は区民でもなければ大学が豊島区にあるわけでもなくて、東京学芸大学の教育学部の表現教育というところにおります。ワークショップファシリテーターとか演劇教育に関わる勉強をしています。こういうサードプレイスの場所にとっても関心があって、最後の1年だったんですけど、オノカラーになれて本当によかったなと思っていて、閉まってしまうのがすごく悲しくて。



安野太郎「安野太郎のとしまZステーション」(2013)

藤：こういう意見ほしかったよね、ありがとう。

熊倉：楽しかったの？

質問者2：楽しかったというのもありますけど、ただ楽しいだけではなくて。自分がやってみたくことに挑戦できる場所というのが限られてきている。自分たち学生の力だけでどうにかしようとしても、お金が足りないだとか場所がないだとか反対する大人が多いだとか。という状況で、こういう活動を豊島区でやってきたというのは本当にすごいなと思っていました。今回これは終わってしまうということですが、この意志を継いで活動していければと思っています。すみません、いろいろ話したいことあったんですけど、いろいろこぼれていっちゃって。そういう感じの大学生もいます！

藤：すごいね、素晴らしいね。本当にこういう意見ほしかったですよ。みんなスイッチ入っちゃったよ。

熊倉：若い人が次々に。日本の未来は明るいぞ。

鈴木：ちょっと思い出したんですけど、僕は、高校生のときに自分のまちの高校には行ってなかったの、中高の同級生がまちにいなかったんですよ。だけど、あるとき、まちで遊んでいるような人たちとどんどん出会っていったんです。でも、その人たち同士は知り合っていない。で、それなら集まる会でもやればいいんじゃないかと思った。当時、パーティーとか流行っていた頃だから、パーティーやったらいいんじゃないということで、場所を借りに行ったんですよ。

でも、探したら全然なくて。結局フタ開けたら150人くらい集まる会だったんですけど、そんな場所なかなか高校生には貸してくれなくて。結局貸してくれたのはフィリピンパブだった。フィリ

ビンバは場所を貸してくれて、ステージもあって音響もあって。20年以上前ですけど、当時でも苦労しました。今はもっと苦労するんじゃないかなというのを話を聞いて思い出しました。

質問者3: 私は去年オノカラーに入れてもらって、絵を描いています。子育てはほぼ終わりで、上は23歳で下は18歳。美術をずっとやっていて、最近、絵画展で入賞しまして、これからはもっとお金につなげていきたいなと思って。どんな人でもお金をわずかでも得られるシステムをみんなで考えていけたら、本当はもっと人も呼べるし、すごく発展するんじゃないかって。誰でもひとつは何か得意とするものって絶対あるはずじゃないですか。それをみんなで考えてお金につなげていく。売れた喜びとか、それを共有するとか、そういうことをやっていると、ここはまだまだ発展するんじゃないかとずっと思っていました。お金を得ることはダメなんですか。

熊倉: 主催者的にはいろいろめんどくさいことがあるんですけど、活動自体はOKですよ。あとのくらいあれば、それをやったのという感じですか。こんな突然なくなると思ってなかったかもしれないですけど、あと1~2年あったら自分でもそれをやったと思いますか。

質問者3: 本当にもう100円とかでいいんですよ。月に1回企画してみんなでつくったものを売りましょうとか、そういうちょっとしたからはじめたらいいと思うんですが、そういう作品展とか。

藤: マーケットとかね。

質問者4: ダンスの振り付けの指導をしたり、武蔵野美術大学で非常勤講師をしたりしている者です。一昨年度まで、鹿児島で地域おこし協力隊として芸術祭を企画して、終わってからは国民文化祭

で、1万6,000人の小さな行政だったんですけど、そこでやってきました。結果としては、いろいろ敗北して帰ってきた感はあるんですけど。しかし、行政側のことがよくわかったので、その観点から一言言いたいなと思っています。

というのも、私は知らなかったんですけど、行政職員は自分の意思に反して転勤とか異動があって、自分がつくったプランを最後まで遂行できず、いきなり文化課から保険課になるとか、税務課から全然知らないなとか学校の校長先生になるとか、結構過酷な一生を送られている。逆に、人がつくったものを自分のものにして、自分がそこに勤務している間やり遂げるといって、そういう能力もあるんですね。

もうひとつは議会というものが、予算に対して責めに合うわけです。田舎の場合だと、議員さんはアートとか全然関係ない人が多くて責められるんですね。何人動員しましたとか、売り上げは行政はないんですけど、いくらか節約しましたみたいな、わかりやすいものがないと責められる。上下関係もあるし、地域といっても10人いたら10人違うこと言っても、10人全員満足することなんてないですよ。アート活動にしてもお金を儲けたほうがいいのか、ないほうがいいのか。そういうなかで頑張っている人たちがもっと頑張りがやくなる状況をつくっていかないとダメなんだろうなというのが、私の今思っていることです。

行政の仕組みは変わらないんですが、行政のなかにどれだけ理解者をつくるか。職員のみなさんが企画を立てて説得して遂行して、それが他人の企画でも遂行できちゃう能力があるんだとしたら、そういうことができやすい状況をつくってあげるといって、やり手側の仕事だと思えます。さっき熊倉先生がおっしゃっていた、「公園の展示を展覧会と言うのは行政的には難しいですよ」というのも、挑戦することも大事だけど、こういうふうに持っていったらあげたほうが行政のなかで通りやすいなみたいな、その接点をアーティスト

側としてもサポーター側としてもつくっていくことも大事だなと思うんです。

熊倉: 特に行政の論理では、みんなが理解しやすいものであることが大事なのと、今おっしゃったようにバックに議会が控えていて、そういう議員さんを選んで市民の責任は大きいと思うんですけども。なかなか難しいですが、いろいろやりようはあると思うんですけど、そのへんの翻訳が難しかったのかな。

質問者5: こんばんは。私は雑貨店の店主です。去年の夏、私が今やっているプロジェクトをどうやって広めていけるかを知りたくて区役所へ行ったら、ちょうどしまアートステーション構想のチラシを見つけて、オノカラーに応募しました。私は今日とても切実な想いを抱えてここに来ていて、お話も一生懸命聞いていました。たぶんオノカラーという枠組みがなくなっても同じような活動を続けますし、今も続けています。

私は、東長崎という西武池袋線で池袋から2つ目のまちで小さい雑貨店をやっています。住む人は増えているんですが、小さいお店を利用する人が減ってきて、大型店に行っちゃうので、小売店の人が困っているのを見ている。それでもまだ商店街の人たちが頑張っているんですけど。なんとかひとつひとつのお店に来てもらいたいなと思っています。それから、アーティストさんがもっと来やすいまちになってほしい。レトロなまちの雰囲気なんですけど、そのまちのよさをもっと若い人に知ってもらいたくて、アートで何かできないかと考えてアプローチしていました。

去年の2月くらいからはじめて、5月からアートイベントをやりました。27軒のお店に声をかけて、アーティストから募集したA4サイズの絵とか写真を飾ってくださいとお願いしました。2ヶ月間その作品を展示してもらって、アーティストさんにも来てもらいました。お店の人にもアート作品を

飾るのは楽しいし、人が来てくれるきっかけになったり、話題になったりするんだよということを伝えたくてひとりではじめました。作品は60点集まりまして、お店は27店舗。そこに1点ずつ飾りまして、それを2回やって、今3回目を企画中です。なかなか広まっていけないんですけど、お店の人たちが何軒か協力してくれるようになりました。自分のお店ではこういうアプローチをしてもいいよとか、ノベルティ出してもいいよとか、そういうふうにだんだん言ってくれるようになったので、今の話にあったアートと暮らしを近づけるといって、少しくづき歩みは始めているのかなと思うんです。

「アート」って聞いただけで引いちゃう人がいますが、どうしたら人が動きかけになるのかということも教えてもらえたらいいなと思っています。アートをいろんな人に伝える、その伝えやすいやりかたに関してとても興味があります。

藤: 僕は、いつも言っていることなんですけど、「アートだからいい」とは全然思っていない、本当に。むしろ、「いいからアートだ」と思うんですよ。すごいものだから、それをアートと呼んでいるんです。常識を超えてすごいものだからアート。決してアートのフレームのなかにあるからいいわけじゃないんですよ。美大の学生がつくるものはアートかというそうじゃないんですよ。アートを目指している人たち、アートをつくらうとしている人たちがアーティストなんですよ。ただ、ここでできたものが本当にアートかどうかということとはわからない。でも、アートをつくらうとしている。つまり、すごいものやすごいことをつくらうとしている。

その意味では、アートを置いていくというのは相当大変なんです。60個も置くと相当大変だと思う。それを集めるのでさえ大変だと思うんですけど。一番紛らわしいのはアートっぽいものね。アートっぽいものはアートじゃない。僕がつくって

るからアートだ！なんて絶対思わないし。活動しながら本当にいいものつくろうとしていると思うけど、なかなかそう簡単にできるものじゃないことをアーティストなら知っています。アートをつくろうと思っている人たちのそのプロセスでできたものたちが、その店にとっていいかどうかというのは、本当にその人との関係のなかでつくられていくものなので。その関係をつくっていくことがすごく重要だと僕は思います。本当は芸術祭とか、もうすぐで大変なはずなんです。すごいものがアートですから。超えているものがアートなんだから。

熊倉：そこまでそんなに難しく考えなくても（笑）。

藤：一応ね、アートを目指している人なので。未だに目指している状態で、まだデビューできていないんです（笑）。

熊倉：無自覚にアートって言っちゃってると危険ですね。

でも、その後で、「これのどこがアートなんだ」ってまちの人と言うのが面白いので、信頼関係を結べた人とは「アートだから」とか言って酒の肴にするので、何がアートなのかは永遠の謎。「先生、何がアートなの？」とか言われるから、「謎だね」とか言ってね。そういうときには、「藤浩志さんって未だに目指している人が言うにはね」とかね、「なんだかわかんねえや」って普通に言える国にしたい。

藤：でも、やっぱりアレルギー持っている人、本当に多いです。

熊倉：見ちゃいけないって思っている人って多いよね。「私なんかが見ていいんですか」っておばあちゃんに言われることはある。

質問者 5：焼き鳥屋さんのドアの前に絵を飾ったり写真を飾ったりとか、普段美術館に行かない人とかにいろんなものを見てもらえたり、飾ったりするものを見てもらえるようなことをしていたので、そういうときの反応とかはすごく新鮮で面白かったなと思ってたんですけども。

オノコラーとして活動したときに、なかなか自分たちでやろうと思っても使えなかった広場を使わせていただいて、作品発表をやらせていただきました。それはとしまアートステーション構想でオノコラーとしてやらせていただいたからこそと思うので、すごく印象に残ったし、すごく感謝しているということだけお伝えしたいと思っています。

質問者 6：雑司が谷在住 20 年です。今日初めてオノコラーという言葉を知りました。最初に質問した方を私は擁護するんですが、この地域で 10 年ほど前にやったアートプロジェクトで失敗したことがあります。

私が考えるに、楽しい場をいっぱいつくれば、それがプロジェクトかっていうとそうではなくて。アートでその地域の問題を何か解決したりとか、その地域の人たちのモチベーションが上がったりとか、そういう結果をもって初めて、アートプロジェクトは成功したというのではないかと自分では思っています。そういう点で、私はこのとしまアートステーション構想が、としまアートステーション Z の周りの雑司が谷の住民に愛を注いでくれたのかという非常に疑問に思っています。どのように情報発信をして、どのようにその住人の問題を探り、その問題を解決しようとしたのか。

例えば、今日のシンポジウムにおいて、私は雑司が谷在住のおじいちゃんか誰かがすごく過激な発言をしてくれるのを期待していたんですけども（笑）、このなかに Z の周りには雑司が谷の住民の方がどれだけいるのか。もしかしたらいらっしゃるかもしれないんですけども、

そういった雑司が谷とか高田住民というものが、一部欠けたような印象を持っています。

この事業が終わってしまうというのは本当にショックなんですけれども、私も。アートプロジェクトというのが地域でなされるのであれば、住民を決して無視してはできないものなのではないかと、豊島区役所の方たちにも言いたいです。

質問者 7：私も生まれも育ちもこのへんですが、全く知りませんでした。

2 点ありまして、1 点目はこういうようなプロジェクトは全国で行われているということなんですけど、全く伝わらないので、どのように情報発信しているのかということと、どうやって検索すればいいのか。というか、プロジェクト名をピンポイントで検索しなくちゃ出てこないんじゃないかと思ったのが 1 点。

あと 2020 年のオリンピック、パラリンピックに向けて、アートがレガシーになるように進めてらっしゃるってことだったんですけど、オリンピック、パラリンピックにおいて、スポーツの文化ですとか、訪日外国人が観光しやすいようになっていうのはわかるんですけど、なんでアートが残るようにしたいのかがあまりよくわからなかったのがもう 1 点です。

熊倉：アートが残るようにするとは言っていませんよ。市民がより自由に文化的になるような国にしたいと言ったんです。なぜならスポーツは文化の一部だから。

鈴木：最後に情報発信のことを言われましたが、僕も自分で何かやっているときにそれを言われて、手がかけられないな、お金のかけられないなということがわりと多いです。お金があればいいわけではないのですが、ある程度あると、専門家を連れてきたりできる。でも、結構厳しいので、身につまされています。

一言思うのは、まちに対してとか社会に対してというモチベーションじゃなくて、自分の生活に対してもう少し視野を広げたりとか、一歩行動に移すみたいなことを触発するのが、こういう場所の意義なんじゃないかと思っています。それはオノコラーじゃなくても、派手な活動をするんじゃないかと、棚が 1 個足りないんだけど、隣のおじいちゃんが昔大工だったらしいから声をかけに行けるだとか。そういうことを小さくでも実現できる人が増えていくように触発する場なのだと思います。それを行政が支援していくときに、どうやってそれを評価していくのかというのはまだまだ考えていかなくてはいけないと思うんですけど。そういった感覚がないと、全部数値になるような短絡的なものばかりが生活の周りに用意されて、僕らはそれを消費するだけということになってしまうんじゃないかと思う。なので、この場所でもこの近隣でも、そういう人が広まっていったらいいと思います。

藤：広報についてはずっとお叱りを受けています。十和田の美術館も、人口 6 万くらいの小さいまちで、その中心にデーンとあり、毎月、市の全戸配布の広報誌に必ずイベント情報を載せて、中心の商店街の全店舗に展覧会ごとにポスターを貼り、バナーを吊り。なのに「知らなかった」「なんて言ってくれないんだよ」って言われます。美術館としては可能な限りあらゆる手段でずっとつながろうとしています。新聞、雑誌、DM 発送、サイトの更新、SNS で、できる限り発信しているつもりです。広報も PR 活動も。でも、知られていない。人は興味のないことは見えないのだと思います。

例えば、今から自分の家に帰るまでの間にどれくらいの段差があるかなんていうのは、足が不自由じゃないと知らないわけです。パチンコ屋が何軒あるかっていうのは、パチンコをする人は知っているけど、していない人にとってはどれがパチンコ屋かも知らない。あんなに派手でも全然知らない

わけです。それだけ興味関心で見えるものは変わるということです。

十和田の美術館でずっと怒られていたのは、「なんでテレビ広告しないんだ」って。青森県立美術館ってテレビ広告バンバンするんですね。だから十和田もテレビで宣伝するものだと思われている。青森県民はテレビで広告していることしか知らない。テレビで広告してくれないと困るじゃないかって怒られます。「いくらかかると思っているんですか!」と吠えたくなるのをぐっと我慢。お金ってそんなに使えない。予算の問題もあるけれども、手を替え品を替え努力はしていますが、伝わってないのが正直なところですよ。

そもそも、本当に広く伝えることだけがいいのかというのも難しい。しかし、探している人には見えるように、求めている人にはちゃんと届くように情報は出さなきゃいけない。むしろ、広く多くに伝えるよりは、本当に必要な人にちゃんとつながることが重要だと思っています。そのためにはどうしたらいいかということを経営者としては考えなきゃいけない。やってなかったとは言えない。やっていたんですよ、当然ね。やっていたけどやりかたについてはまだ答えが出ないというのがたぶんあると思います。みんな頑張ってください。

太下: 最後なので理想的なことを言わせていただくと、さっき鈴木さんが触発の場というキーワードをおっしゃったし、さらにちょっと前に藤さんが今ない価値をつくっていくんだということを言っていて、そういうことが大事なんだろうと思うんですね。

これから2020年へ向けての3年間は、アート業界がざわざわすると思うんですけど、それが終わってから10年後に今を振り返って、やっぱりあれが効いていたのかなとか、あれで変わっていったんじゃないか、というような振り返りができる3年間にしてみたいと思います。やや突拍子

もないことを言うと、それこそオノコラーっていうのがひとつの職業になるようなことです。また、商店街に地道に絵をかけていくことがひとつの生き様、というか生業になるということがあってもいいと思うのですよ。

実は、前回のオリンピックではそういうことが起こっています。これはわりと有名なエピソードですけれども、1964年のオリンピックを契機として、日本においてデザイナーという職能が確立して、職業になったのです。もちろんその前にもデザイナー的なことをやっている人はいたわけですよ。オリンピックで亀倉雄策さんが素晴らしいポスターをつくったじゃないですか。あれを多くの国民が見たことによって、やっぱりビジュアルメッセージってすごいなと思って、それ以降、企業も役所もみんなポスターとかチラシをちゃんとつくるようになったんですね。じゃあ、それ以前にあのような人たちはどういう職業であったのかというと「図案屋さん」と呼ばれていたのです。あんまり尊敬の念が入ってないような名前ですよ、図案屋さん。

例えば、本日参加されているみなさんのお子さんや親戚の方が大学生だとして、「大学出たらデザイナーになろうと思うんだ」って言ったら、「すごいな、頑張れよ」って感じになるじゃないですか。ところがですよ。ここへ来てらっしゃる方の多くはアートに関心ある方だと思えますけど、それでも、自分のお子さんとか親戚のお子さんとか「大学出たらアーティストになろうと思うんだ」って言ったら、したり顔で「お前わかってないな、社会が」と。「アートなんかで食えると思ってるのか」って、たぶん説教するじゃないですか。でも、それって不幸な社会だと思うのですよ。全員のアーティストが金持ちになる必要はないんですけど、せめて選択肢としてアーティストやクリエイターが職業となるべきだし、さらに言えばアートを支えるようなさまざまな職業についてもこの3年間にその根っこが出てくるべきだと思う

のです。たぶんとしまアートステーション構想はその根っこをつくるプロセスだったのだらうなと思います。これで中断してしまうのは残念ですけど、きつとどこかへ胞子が飛んでいって、この意思をついでくれるのではないかと考えています。

熊倉: というわけで、豊島区に住んでいない若い人が外から来て支えてくれた、あるいは雑司が谷じゃないところからオノコラーになって、自分の住んでいるところに飛び火してくれている。でも、雑司が谷に住んでいる人たちは知らなかったということ。本当はね、「知らなかった。今日知ったんだから続けろよ。私をもっと雑司が谷のためにやってあげるから」って言ってくれたら嬉しかったなと思います。

(閉館の音楽が流れはじめて) なんか、すごいお葬式色。音楽の力は恐ろしい……。

みなさまには月曜日の夜からお集まりいただき、今日たまたま初めて知った方も含めて、たくさんのご意見いただきありがとうございます。パネリストのみなさんも遠くから駆けつけていただきありがとうございます。

■プロフィール

太下義之 (三菱UFJリサーチ&コンサルティング、芸術・文化政策センター長)
公益社団法人日展理事。企業メセナ協議会監事。政策分析ネットワーク協同副代表。文化経済学会(日本) 監事。文化政策学会理事。東京芸術文化評議会委員。大阪府・2025年万博基本構想検討会議委員。沖縄文化活性化・創造発信支援事業アドバイザーボード委員。アーツカウンシル新潟アドバイザー。鶴岡市食文化創造都市アドバイザー。

鈴木一郎太 (株式会社大と小とレフ取締役)
イギリスで10年ほどアーティストとして活動後、NPO法人クリエイティブサポートレッツにて、さまざまな分野と連携した文化事業を担当。2013年にハードとソフトを横断して扱う会社を建築家の大東翼とともに設立。コミュニティスペース企画運営、地域プロジェクトの研究、展示デザイン、演劇作品制作、文化事業計画補助などを行う。

藤浩志 (美術家、秋田公立美術大学教授)
鹿児島生まれ。京都市立芸術大学在学中に京都情報社を主宰。同大学院修了後バブアニューギニア国立芸術学校勤務、都市計画事務所勤務を経て92年、藤浩志企画制作室を設立。各地で地域資源・適正技術・協力関係を活かしたデモンストレーションを実施。NPO法人プラスアーツ副理事長。十和田市現代美術館館長を経て現職。

熊倉純子 (東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授)
慶應義塾大学およびバリエ大学で美術史と現代美術論を学ぶ。公益社団法人企業メセナ協議会事務局勤務ののち、2002年より東京藝術大学で社会と芸術を結ぶ人材を育成する。「取手アートプロジェクト」(茨城県)、「アートアクセスあだち一音まち千住の縁」(東京都)など、地域型アートプロジェクトに携わりながら、アートと市民社会の関係を模索し、国や自治体に文化政策を提案する。

オノコラーの声



としまアートステーション構想に参加し、自分なりのアートステーションのかたちを模索してきたオノコラーたちが、これまでの活動を振り返り、「としまアートステーション構想とはなんだったのか。オノコラーとしての活動を通して何を感じたか」を、それぞれの経験をもとに語りました。その一部を紹介します。

「自由な場」

主催者がつくった企画に人手としてボランティアが入るアートプロジェクトは他にもあるけれど、としまアートステーション構想は、関わる人たちが自分でアイデアを持ってきて、人を巻き込んで企画をつくっていくところだった。これはありそうでない。社会人になると特に。
(30代男性 豊島区在住 2014～2016年度)

「やってみたいことを言い合える場」

利害関係なく、「こういうことをやってみたい」ということを言い合える場ができたこと、実際にこの目で見ることができたのがとてもよかった。
(40代男性 豊島区在住 2015～2016年度)

「自分の好きなところから紐付いて世界を見ることが出来る場」

仕事と家の往復だけではなくて、自分の居場所があるのがとても嬉しかった。自分が何かしたいというのはあまりないけれど、何かやりたい人に巻き込まれているんなことのできるの楽しかった。オノコラーになったことで、アートNPOに転職するきっかけをもらった。
(30代女性 東京都内在住 2014～2016年度)

「全く新しい世界を教えてもらった。」

人と人が出会える場として素晴らしいかった。アートという音楽や絵画で、自分で演奏したり作品をつくったりする人たちがいるのだろうと思っていたけれど、参加してみたら、こんなにいろんな人がいるのか！レコードを聴くという活動もありなのか！と思った。他のオノコラーの活動も面白い。やりたい意欲がある人がたくさんいた。そういう人たちを見ているとアートだなと思う。
(60代男性 豊島区在住 2015～2016年度)

「豊島区に自分の居場所ができた」

自分は豊島区の外に住んでいるものの、繰り返しとしまアートステーションZに来ることで、馴染みの顔ぶれに会って、何かをしながら（また何をすることもなく）一緒にいて時間を過ごせたことで、豊島区に「ここには自分もいていいんだ」と思える安心できる場所ができた。
(20代男性 東京都内在住 2015～2016年度)

「日常が非日常になった瞬間があった」

電車に乗っていて知り合いに気が付くようになるなど、普段の生活のなかで気づきが持てるようになった。
(30代男性 豊島区在住 2015～2016年度)

「サードプレイスで重要なのは人だと思った」

人と人をつなげたり関わりを深くするには、それをつなぐ人の存在が大事。場所だけあってもダメ。事務局スタッフのふるまいを観察していて、自分もできるようになりたいと思った。
(20代女性 東京都内在住 2015～2016年度)

「アートは情熱なんだと思うようになった」

いろんな人を手伝って、電子工作でよくわからないものをつくった。行動する熱量がある人と何かするのは面白い。技術系の仕事をしているので、楽になる・安くなる・性能がよくなるために熱量を注ぐということに対する理解は今までもあったが、アートはその逆だった。
(30代男性 豊島区在住 2015～2016年度)

「他のオノコラーを見て、

自分のやるべきことをあらためて見ざるをえなくなった」
自分自身は活動には参加できなかったけれど、他のオノコラーたちがお金になる・ならない関係なく、表現欲に溢れているのを見て、自分がやるべきことを見出した。お金にならないことは置き去りにされがちだけれど、仕事とやりたいこととの両立をサポートははいけないと思われた。
(40代男性 東京都内在住 2016年度)

「背中を押してもらった」

特にオノコラーフェス2016を通して、多くのいろいろな志を持った人と会うことができたので、自分ももう一歩やってみようかなと、背中を押してもらったような気がする。
(20代女性 豊島区在住 2016年度)

「入口であり出口である」

としまアートステーション構想に関わったことで知ったことや、きっかけが生まれたことが入口。今後はオノコラーという立場を飛び越えてやっていかないといけないというのが出口。
(30代女性 豊島区在住 2015～2016年度)

「ちょっとしたきっかけや考えかたを得られる場」

最初の頃よく来ていたオノコラーたちが最近来なくなっている。彼らは今、自分たちの場所で活動しているんだろうな、よかったなと思う。としまアートステーション構想の活動を通していろんな人と出会うことで、ひとりでは考えつかないことを得て旅立っていったのだと思う。
(60代女性 豊島区在住 2014～2016年度)



2011年より、6年間にわたり実施してきた共催事業「としまアートステーション構想」が終了することになりました。事業を立ち上げるための話し合いは2010年の秋からはじまり、おおよその方向性が決まったところで、翌年の3月24日、事業のお披露目を兼ねた「人とまちをつなぐアート／その新たな展開と可能性を考える」と題したシンポジウムが行われることになりました。その直前の2011年3月11日、東日本大震災による甚大な被害が日本を襲い、シンポジウムは中止となりました。

その後、半年を経て、2011年8月末に本格的な事業が開始しました。震災を受けて、この事業の方向性が変化したかという点、全くそのようなことはありませんでした。むしろ、震災が起こったことにより、私たちの目指していた新しい事業の必要性に対して強い確信を持つに至りました。

その後、あらためて11月に「人とまちをつなぐアート／その新たな展開と可能性」と題したシンポジウムを開催しました。当日の資料には、このようなことが書かれていました。《この構想はハードをつくることを目的としたものではない。……豊島区民をはじめとする多様な人々が、区内各地域のさまざまな場所で、自主的・自発的に、まちなかにある地域資源を活用したアート活動を展開することがゴールであり……それによりコミュニティ形成が促進され、人と人、人とまちがつながっていく。豊島区をそのようなまちにしてゆくために、アートを用いた試みをはじめ。》人と人、人とまちをつなぐアートは、震災直後であるからこそ、より切実なものとなっていたのです。

このような考えかたが生まれたものの、それを実際に事業としてかたちづくることは、非常に困難なことでした。前例のない事業であるため、一からその「つくりかた」を考えていかなければなりません。しかし、豊島区だからこそ実現できる「未来へ向けた実験」として、さまざまな試行錯誤を繰り返して事業を進めるとともに、そのプロ

セスで発見してきた具体的な「つくりかた」を、この本自体を含む「としまアートステーションZ・Y・Xのつくりかた」という3冊の本とカードゲームにまとめることができました。

そして何よりも、この事業を通して、個性豊かなオノカラーたちと出会うことができました。彼ら・彼女らの存在は、この事業が終わったとしても、さまざまな新しい人や活動や場を、豊島区内外に生み出し続け、広がっていくことでしょう。

そして、2017年1月、最後のシンポジウムを、6年前と同じタイトル「人とまちをつなぐアート／その実践と展望」と題して開催しました。そこでは、この本に記録が収められているように、達成できたこととともに課題も挙げられており、もちろん、この6年間で構想が目指した全てを実現できたわけではありませんでした。その意味では、志半ばと思うところもありますが、この時代における「未来へ向けた実験」としての役割は、じゅうぶんに果たすことができたのではないかと、私たちは考えています。

東日本大震災後の時代に寄り添うように行われてきた「としまアートステーション構想」ですが、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向かう今よりも、この事業の本当の必要性は、東京オリンピック・パラリンピック後の未来にこそあるのかもしれない。そして、ここで行われた数々の実験を収めた「つくりかた」が、未来の誰かに届き、再び「アートステーション」と呼びうる何かを生み出していくことを期待しています。

2017年3月11日 震災から6年目の日に
としまアートステーション構想事務局

■ 2011 年度

区民が創造的にまちに関わり、アートを通して自分たちのまちの課題を考えていくための機会を提供することを旨とし、としまアートステーションZを拠点に活動を開始。「地域」「アート」「場づくり」などをキーワードにゲストを招いての勉強会や、招聘アーティストによる4つのアートプロジェクトを実施した。

【主催】
東京都、豊島区、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン

【協力】
日本大学佐藤慎也研究室

【主なプログラム】
シンポジウム
「人とまちをつなぐアート／その新たな展開と可能性」

アートプロジェクト
・Miracle Waterをつくる。（藤浩志）
・L AND PARK (L PACK)
・ポットラックパーティーとしま (EAT&ART TARO)
・キッチンプロジェクト (EAT&ART TARO、中山晴奈)

アートサポート
・Zの会
・アートコンシェルジュ

【総来場者数】
2,272名

■ 2012 年度

としまアートステーションZを拠点に「食」に関するアートプロジェクトを継続。また、新たに3名のアーティストを招聘して「ものづくり」や「地域」「子育て」に関するプロジェクトも実施した。イベントのない日はセルフカフェ形式で飲み物を提供し、区民とアーティスト、事務局の情報交換・交流の場づくりを行った。「としまアートステーションコンセプトブック」「子育てをめぐるタテの対話 阿部初美『としまで子育て 子育てを考えるワークショップ』ドキュメント」を発行。

【主催】
東京都、豊島区、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン

【協力】
日本大学佐藤慎也研究室

【主なプログラム】
アートプロジェクト
・虫をつくるワークショップ（ひびのこづえ）
・Table（岸井大輔）
・としまで子育て 子育てを考えるワークショップ（阿部初美）

・L AND PARK (L PACK)
・ポットラックパーティーとしま (EAT&ART TARO)
・キッチンプロジェクト (EAT&ART TARO、中山晴奈)

アートサポート
・Zの会特別編「ともに生きる技術」（西村佳哲）
・Zの会
・アートコンシェルジュ
・セルフカフェ

シンポジウム
・「2年目のとしまアートステーション構想」

【総来場者数】
5,322名

■ 2013 年度

としまアートステーションZを情報交換・交流の場として引き続き運営。インターンとともに、近隣の施設や商店街との交流や連携企画も行った。アートプロジェクトでは、「身体」「音楽」をテーマに、リサーチや作品制作・発表の場をとしまアートステーションZの外へと広げることで、豊島区の地域性をあぶり出し、区民の新たな視点や主体性を引き出すことや、アートステーション形成につながる地域との関係性を確立することを試みた。

【主催】
東京都、豊島区、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人オノコロ

【協力】
日本大学佐藤慎也研究室

【主なプログラム】
アートプロジェクト
・としまのふるまい（岸井大輔）
・安野太郎のとしまZステーション（安野太郎）
アートサポート
・ふらっとカフェ
・アートコンシェルジュ

【総来場者数】
3,468名

■ 2014 年度

としまアートステーション構想に参加しながら、自分なりのアートステーションを見出していく区民を「オノカラー」と名付けて募集開始。「準備室」をコンセプトに、としまアートステーションZを運営し、オノカラーをはじめとする来場者の活動をサポートした。また、2つめのアートステーションである、としまアートステーションYを、物件オーナーとともに立ち上げた。

【主催】
東京都、豊島区、東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人オノコロ

【共催】
山本山田【としまアートステーションY】

【協力】
日本大学佐藤慎也研究室

【主なプログラム】
としまアートステーションZ
・セルフカフェ
・作業日
・キッチンスタジオZ
～これつくってみたかったんだよね～
(EAT&ART TARO)
としまアートステーションY
・上池ホームズ計画（中崎透）
・シンポジウム
「都市のすき間—文化芸術が生まれる場所—」

【総来場者数】
6,493名

■ 2015 年度

すでに機能を持っている場に新たな人が関わることで創造的な活動を生み出すプロジェクト群をとしまアートステーション X と銘打って実施。アーティストやオノコラーが豊島区内の場や人とコラボレーションし、日常生活の場のアートステーション化を試みた。「としまアートステーション Z のつくりかた」「としまアートステーション Y のつくりかた (冊子+カードゲーム)」を発行。

【主催】

東京都、豊島区、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人オノコロ

【共催】

社会福祉法人敬心福祉会池袋敬心苑
[介護福祉施設×居間 theater]

【協力】

日本大学佐藤慎也研究室、
明治大学木寺元研究室 [都心の住まい×北川貴好]、
みらい館大明・区民ひろば高南第一・中高生センタージャンプ長崎 [地域に密着した公共施設×オノコラー]

【主なプログラム】

としまアートステーション Z

・作業日

としまアートステーション X

・区役所×居間 theater (居間 theater)
・介護福祉施設×居間 theater (居間 theater)
・都心の住まい×北川貴好 (北川貴好)
・地域に密着した公共施設×オノコラー

【総来場者数】

7,680 名

■ 2016 年度

前年までに構築したアートステーションというものの概念とそのつくりかたを周知し、地域に定着させていくため、アートステーションという概念に触れることのできるイベントや、としまアートステーション構想を経て生まれつつある区民主体の活動を広く発信するイベントを実施した。「としまアートステーション X のつくりかた」を発行。

【主催】

東京都、豊島区、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人オノコロ

【協力】

日本大学佐藤慎也研究室

【主なプログラム】

としまアートステーション Z

・作業日

としまアートステーション X

・アートステーション構想推進課 パフォーマンス窓口 (居間 theater)
・としまアートステーション W パフォーマンス待合室 (居間 theater)
・オノコラーフェス 2016

シンポジウム

・「人とまちをつなぐアート/その実践と展望」

【総来場者数】

5,329 名

としまアートステーション構想

主催：東京都、豊島区、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人オノコロ
協力：日本大学佐藤慎也研究室

プロジェクト担当

豊島区：樋口英一郎、田中淳士

アーツカウンシル東京：森司、坂本有理、嘉原妙

一般社団法人オノコロ：佐藤慎也、石幡愛、冠那菜奈、宮武亜季、藤井さゆり

■ としまアートステーション構想とは

豊島区民をはじめとする多様な人々が、区内の魅力あふれる場所で地域資源を活用し、当事者として主体的にアート活動を行い、その活動がさらに多くの人々の主体性を生み出す。そんな新しい公共活動のあり方を目指し、個人個人の自発的なアート活動を支援することで、地域や人々の想いをつなげるシステムづくりを目的としています。自然に発生したささやかなアート活動が結び付き、人や街とともに暮らすことができる、そんなきっかけをつくり出すための文化事業です。本事業は、豊島区文化政策推進プランのシンボルプロジェクトである「新たな創造の場づくり」のプログラム及びアーツカウンシル東京事業「東京アートポイント計画」の一環として、東京都、豊島区、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、一般社団法人オノコロの連携により実施しています。

<http://www.toshima-as.jp>

■ 東京アートポイント計画とは

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都とアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）が展開している事業です。まちなかにある様々な地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となる NPO を育成します。

<http://www.artscouncil-tokyo.jp>

■ 豊島区の文化政策とは

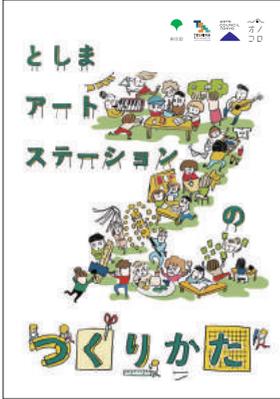
豊島区は 2003 年 3 月に策定した「豊島区基本構想」のなかで、文化によるまちづくりを基本方針の柱の一つとして位置づけ、2005 年 9 月「文化創造都市宣言」、2006 年 4 月に「豊島区文化芸術振興条例」を施行、区民・NPO 法人・企業・大学等地域の人々とともに、「文化の風薫るまち としま」の実現に向け、様々な文化施策・事業を展開しています。このような長年にわたる取り組みが高い評価を受け、2009 年 1 月に東京都で初となる「平成 20 年度文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）」を受賞しました。

■ 一般社団法人オノコロとは

文化及び芸術の振興を通じ、地域社会の発展に寄与することを目的として、2013 年に設立。文化事業を通して、市民が「当事者意識」を持つことで主体的にまちに関わり、自らがネットワークやコミュニティを「自分ごと」としてつくり出すために、地域が活気にあふれ、市民が自発的な活動を継続的に行える仕組みづくりを行います。2013 年 9 月より、としまアートステーション構想の運営に参加。

■関連書籍

としまアートステーションZのつくりかた



発行：2016年3月31日

判型：A5

頁数：64ページ

多様な人が集まり、その交わりから新たな活動が生まれる場をつくるための心がけや工夫についてまとめました。場づくりに関わりたい人やはじめたい人が、自分なりの方法を見つけるための手引きとして、活用できます。

としまアートステーションYのつくりかた



発行：2016年6月30日

判型：冊子 A5 / カードゲーム 63mm×89mm

頁数：冊子 60ページ / カードゲーム 114枚

地域をリサーチして見つけた場所・人・活動をマッチングして、それぞれの特徴を活かした区民主体の小さな活動や拠点をつくる方法について、冊子とカードゲームという2つの形式でまとめました。ゲームを使って場や活動のつくりかたを考えるワークショップも行っています。

としまアートステーションXのつくりかた

発行日：2017（平成29）年3月23日

監修：佐藤慎也

編集・執筆：石幡愛、冠那菜奈、宮武亜季、藤井さゆり

写真：としまアートステーション構想事務局、富田了平

デザイン：進士遼

発行：としまアートステーション構想事務局

〒171-0032 東京都豊島区雑司か谷 3-1-7 千登世橋教育文化センター B1F

としまアートステーションZ

としまアートステーション 